

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書V

—— 第14次調査 ——

2024
令和6年3月

平泉町教育委員会

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅴ

—— 第14次調査 ——

2024

令和6年3月

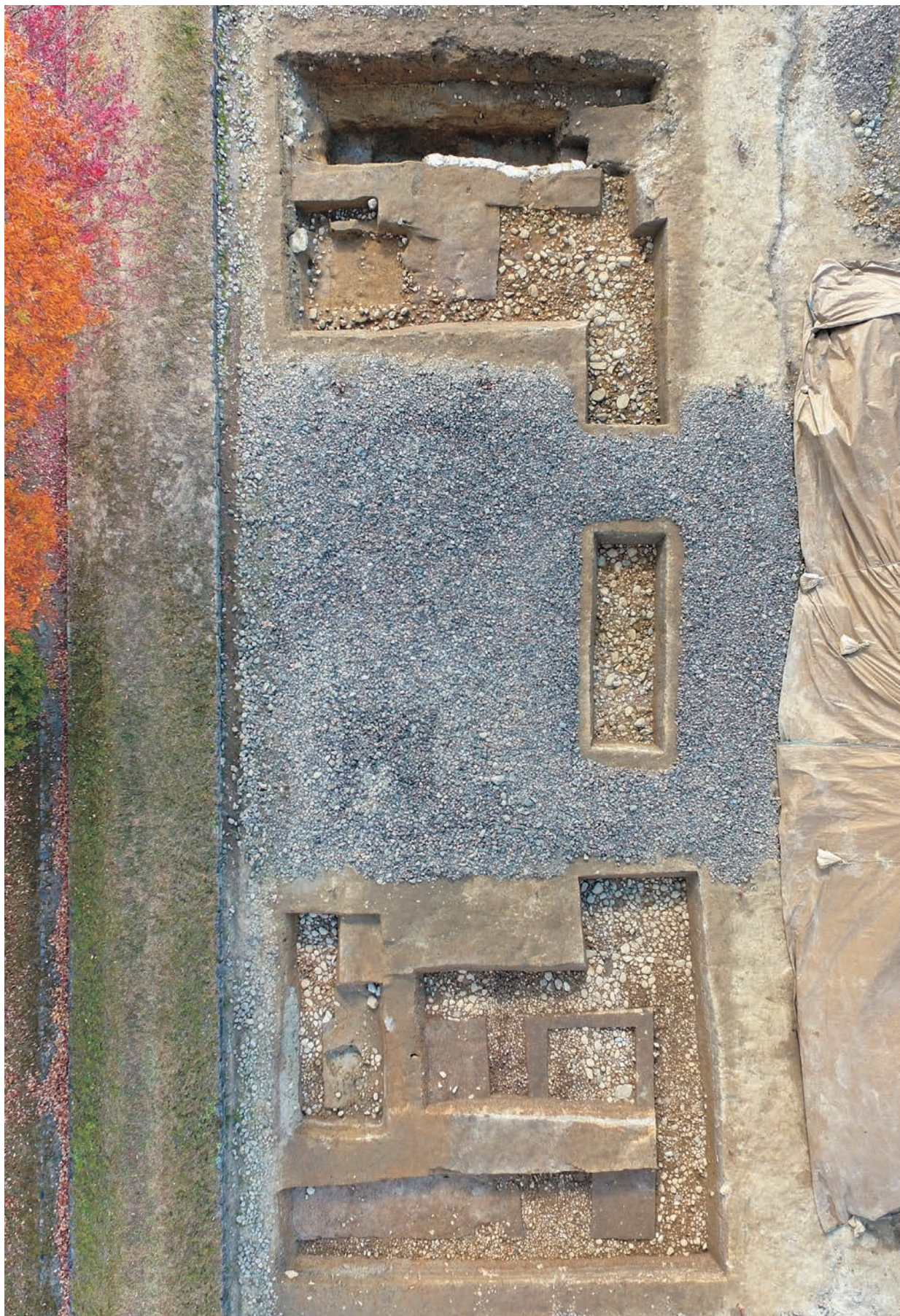
平泉町教育委員会



旧観自在王院庭園全景（南から）



調査区全景（南から）



道路側調査区全景（北から）

序

平泉町内には、特別史跡中尊寺境内・毛越寺境内附鎮守社跡・無量光院跡、史跡柳之御所・平泉遺跡群、達谷窟、金鷄山、特別名勝毛越寺庭園、名勝旧観自在王院庭園・おくのほそ道の風景地など奥州藤原氏に関連する数多くの国指定文化財が狭い町域に分布しています。

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』文治五年（1189）九月十七日条の「寺塔已下注文」に、観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安倍宗任の娘）が建立したこと、小阿弥陀堂も基衡の妻が建立したことが記されています。

観自在王院跡は、昭和27年に国の特別史跡毛越寺跡附鎮守社跡の一部として指定されました。昭和29～31年に平泉遺跡調査会によって行われた調査によって、園池の北側から大阿弥陀堂及び小阿弥陀堂の痕跡を示す礎石が発見されたほか、園池の南側では棟門跡が確認されています。平成17年には旧観自在王院庭園として名勝に指定されています。

当町では、遺跡の重要性に鑑み昭和47～53年度にかけて地元の方々のご理解とご協力を得ながら史跡整備を進め、史跡の恒久的な保存措置を図りましたが、昭和の整備完了から約40年が経過し、平成27・28年度に史跡南西側の公有化を実施したことを契機に、平成30年度より再整備を視野に入れた内容確認調査を開始しました。

本報告書は令和4年度に実施しました第14次調査成果を収録したものです。この調査では、毛越寺と観自在王院との間に位置する道路跡を対象に調査を行いました。この南北道路は昭和52年の発掘調査で道路面が石敷であることが確認されており、今回再調査を行い、石敷の状況と位置を改めて確認することができました。

観自在王院跡保存修理事業につきましては、地域住民の方々をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました文化庁・岩手県教育委員会・平泉遺跡群調査整備推進会議・宗教法人毛越寺に対し深く感謝申し上げます。

令和6年3月

平泉町教育委員会

教育長 吉野新平

例 言

- 1 本書は令和4年度に国庫補助事業より実施した名勝旧観自在王院庭園第14次調査の報告である。
- 2 野外調査期間は令和4年8月29日から令和4年12月12日までである。室内整理期間は令和5年3月31日までである。
- 3 調査地点は岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山地内である。調査面積は約151㎡である。
- 4 発掘調査の主体は平泉町教育委員会である。

(1) 令和4年度

平泉町教育委員会

教 育 長 吉 野 新 平

平泉文化遺産センター

館 長	長	高 橋 国 博	主 任	千 葉 徹
館 長 補 佐		島 原 弘 征	主任文化財調査員	菅 原 計 二
主任主査文化財調査員		鈴 木 江 利 子	補 助 員 (臨時)	二階堂 里 絵
文化財調査員		鈴 木 博 之	補 助 員 (臨時)	佐 藤 昌 弘
主 任		佐々木 成 淳	補 助 員 (臨時)	熊 谷 明 美
主 任		鈴 木 理 世	補 助 員 (臨時)	菊 地 道 子
文化財調査員		藤 田 崇 志		

(2) 令和5年度

平泉町教育委員会

教 育 長 吉 野 新 平

平泉文化遺産センター

館 長	長	高 橋 国 博	主任文化財調査員	菅 原 計 二
館 長 補 佐		島 原 弘 征	主任文化財調査員	鈴 木 江 利 子
主任文化財調査員		鈴 木 博 之	補 助 員 (臨時)	二階堂 里 絵
主 任		小野寺 俊 英	補 助 員 (臨時)	佐 藤 昌 弘
主 任		鈴 木 理 世	補 助 員 (臨時)	熊 谷 明 美
文化財調査員		藤 田 崇 志	補 助 員 (臨時)	菊 地 道 子
主 任		千 葉 徹		

- 5 発掘調査・室内整理は鈴木江利子・鈴木博之・島原弘征が担当し、二階堂・菊地の協力を得た。事務は佐々木（令和4年度）、鈴木理世（令和5年度）が担当した。
- 6 本書の執筆は、鈴木江利子・島原が担当した。
- 7 調査の基準点は平成30年に観自在王院跡に設置した基準点（平面直角座標X系に準拠）をもとに調査員が打設した。
- 8 土層観察の土色は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄2001）によった。
- 9 調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備推進会議、現地説明会（令和4年11月26日）、平泉町HP等で公表している。上記と内容が異なる場合は本書を優先する。
- 10 発掘調査及び室内整理にあたっては、次の方々ならびに機関からご指導とご協力を賜った（順不同・敬称略）
宗教学法人毛越寺、文化庁、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備推進会議、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 11 出土遺物及び写真・図面等の調査に関わる資料は平泉町教育委員会が保管している。
- 12 発掘調査参加者（順不同・敬称略）
阿部美紗、阿部利彦、石川誠、大石しずえ、小野寺孝一、小野寺富子、川崎寛、小岩佳彦、佐々木政記、佐々木利雄、佐々木敏治、佐々木直久、佐藤綾男、佐藤歌奈子、佐藤謙一、佐藤さよみ、佐藤参、佐藤正志、菅原久美子、菅原聡、束稲正博、田村功、高橋純一、千條あえ子、千葉一郎、千葉一男、千葉京子、千葉景姫、千葉忠枝、千葉晃久、千葉ナカ子、千葉正行、千葉光春、鳥畑恵美子、那須野繁男、西悠太郎、橋階義彦、矢崎静香、矢崎木綿子、吉田琴子

目 次

I 位置と環境	1	III 調査成果	5
1 観自在王院跡の位置	1	1 検出遺構	5
2 観自在王院跡の現状	1	2 調査概要	7
II 調査の概要	3	3 出土遺物	22
1 調査目的	3	IV まとめ	25
2 調査方法	5		

表 目 次

第1表 観自在王院跡調査履歴	3	第5表 近世陶磁器観察表	24
第2表 かわらけ観察表	24	第6表 瓦観察表	24
第3表 国産陶器観察表	24	第7表 木製品観察表	24
第4表 土師器観察表	24		

図 版

第1図 平泉町の位置	1	第9図 14-2断面図	12
第2図 周辺の遺跡分布図	2	第10図 14-3平面図・断面図	13
第3図 観自在王院跡第14次調査位置図	4	第11図 石敷測点・標高値	15
第4図 観自在王院跡調査位置関係図	6	第12図 14次調査位置図(14-4～7)	16
第5図 14次調査位置図(14-1～3)	8	第13図 14-4平面図・断面図	17
第6図 14-1平面図	9	第14図 14-5平面図・断面図	18
第7図 14-1断面図	10	第15図 14-6・7平面図・断面図	19
第8図 14-2平面図	11	第16図 出土遺物	23

写 真 図 版

写真図版1 14-1～3	26	写真図版9 14-4～7	34
写真図版2 14-1	27	写真図版10 14-4	35
写真図版3 14-1	28	写真図版11 14-4	36
写真図版4 14-1	29	写真図版12 14-5	37
写真図版5 14-1	30	写真図版13 14-6	38
写真図版6 14-2	31	写真図版14 14-7	39
写真図版7 14-3	32	写真図版15 調査状況	40
写真図版8 14-1～3	33	写真図版16 出土遺物	41

I 位置と環境

1 観自在王院跡の位置

平泉町は、岩手県の南部に所在する人口約7,000人、面積約64平方kmの小さな町である。東側は東稲山（595.7m）、音羽山（539m）、観音山（325.2m）が連なる北上山地、西側は奥羽山脈に続く標高100～200m前後の丘陵地に囲まれ、中央部には北上川が南流し、その両側に田園地帯が広がっている。南側を一関市、北側を奥州市に接している。

平泉は、12世紀に奥州藤原氏の拠点として栄えたが、源頼朝によって1189年に滅亡する。その繁栄と滅亡の歴史は、多くの詩歌を喚起する素材となり、1689年平泉を訪れた俳人の松尾芭蕉をはじめ、多くの文人たちを惹きつけ、往時を偲ばせている。平成23年には町内に所在する5つの史跡名勝が「平泉―浄土を表す建築庭園及び考古学的遺跡群―」として世界遺産登録され、旧観自在王院庭園その構成資産の一つとなっている。



第1図 平泉町の位置

2 観自在王院跡の現状

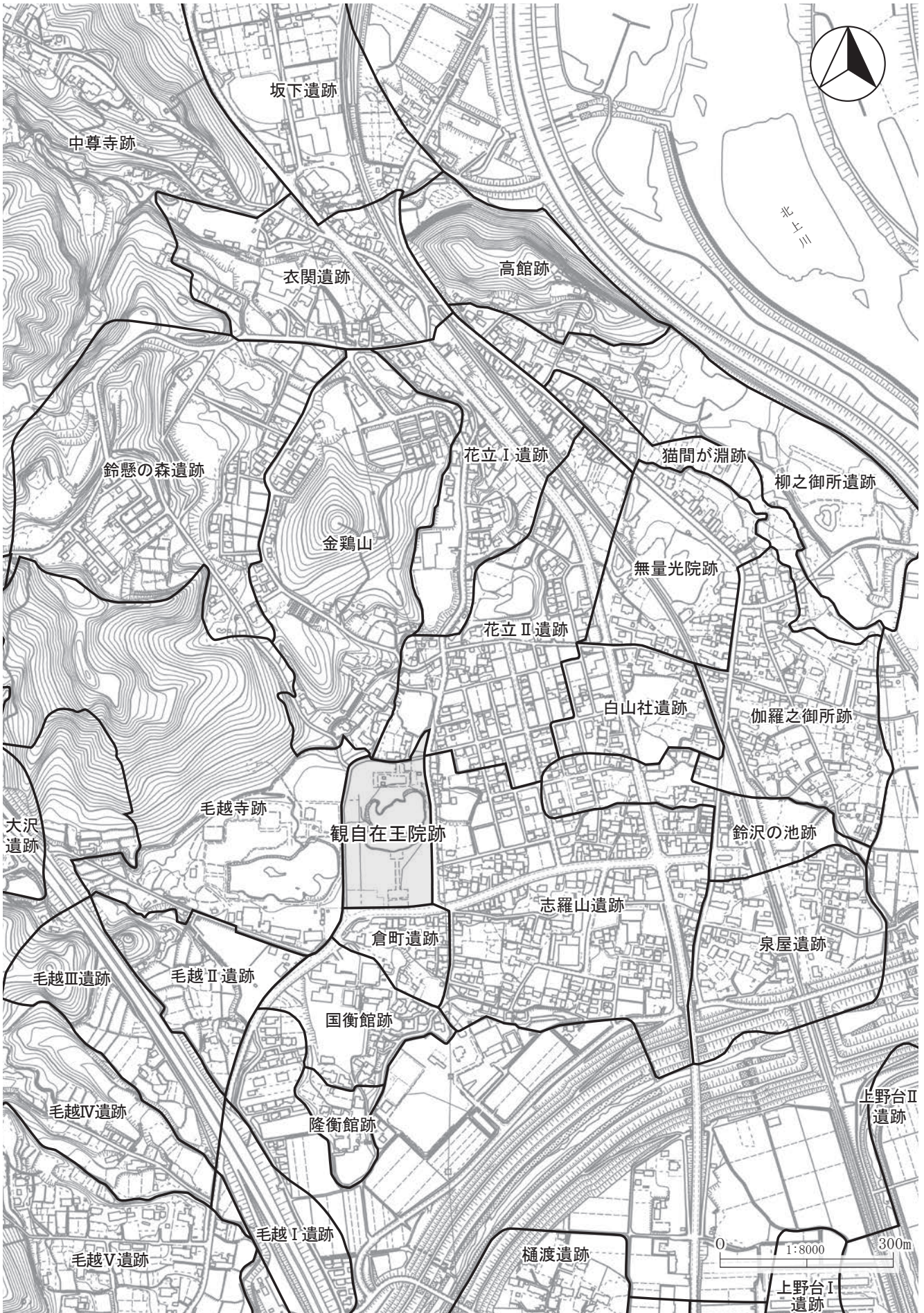
観自在王院跡は毛越寺の東隣に位置する。『吾妻鏡』には観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安倍宗任の娘）が建立したこと、小阿弥陀堂も基衡の妻が建立したことが記されている。

境内の大きさは南北250m、東西120mを測り、敷地の北側に大阿弥陀堂・小阿弥陀堂などの主要堂宇が建ち、その南側には中島を擁する舞鶴が池と呼ばれる大きな園池が位置する。

昭和29～31年に平泉遺跡調査会によって行われた1～3次調査によって、園池の北側から大阿弥陀堂及び小阿弥陀堂の痕跡を示す礎石が発見されたほか、園池の南側では棟門跡が確認された。昭和47～52年には史跡整備に伴う内容確認調査（4～8次）が行われ、新たに西門跡、導水路、牛車を収める車宿が見つまっている。導水は池西側にある滝石組から供給されているが、滝石組に接続する導水路は西側土墨付近を暗渠でくぐり、毛越寺裏にある弁天池を取水源にしていることが確認された。なお、暗渠に用いられた材木はクリ材であった（調査履歴は第1表参照）。

前述の平泉遺跡調査会による調査の後、平泉町は「平泉町文化財保護基本計画」を策定し、「観自在王院跡保存整備計画」に基づき観自在王院の復元的整備を実施することとした。計画は①土地の公有化と整備、②文化財の管理保護、に重点を置いたもので、文化財に対する国民の親しみと理解を深めることがねらいであった。土地の公有化は昭和42～50年度まで行い、整備事業は一部公有化と同時進行となるが、昭和49～53年度に実施している（平泉町1979）。

その後、平成17年に名勝旧観自在王院庭園として指定され、昭和27年の特別史跡指定と併せて、史跡・名勝の二重指定を受けた。平成27・28年には昭和整備の際に公有化できなかった史跡南西側の公有化を実施した。整備完了から40年が経過し老朽化等の課題もあったことから、史跡南西側の整備に併せて、これらの課題解消のための再整備事業が求められていたため、平成30年度より整備に必要な情報を取得するための内容確認調査を開始した。



第2図 周辺の遺跡分布図

第1表 観自在王院跡調査履歴

回数	主 体	原 因	期 間	面積㎡	内 容
1	平泉遺跡調査会	内容確認	S291011～1110		・伝大阿弥陀堂跡、伝小阿弥陀堂跡、中間地区、伝鐘楼跡、伝普賢堂跡、中島、池跡（滝石組、東北岸）の調査
2	平泉遺跡調査会	内容確認	S301005～1109		・伝大阿弥陀堂跡、伝小阿弥陀堂跡、中間地区、南門跡、池跡（東北岸）の調査
3	平泉遺跡調査会	内容確認	S311009～1125		・伝大小阿弥陀堂北側を調査したが、遺構は確認されず。
4	平泉町教育委員会	復元整備	S471023～480323	400	・池導水路及び中島規模の確認を目的とした調査で、導水路は滝石組から西側土塁下を暗渠でめぐり毛越寺方向に延びていることを確認した（整備事業1次調査）。
5	平泉町教育委員会	復元整備	S481014～1122	454	・北西畔平坦地の遺構の有無、西側土塁の追跡、中島東岸と普賢堂の調査を実施（整備事業2次調査）。
6	平泉町教育委員会	復元整備	S500728～1105	341	・大阿弥陀堂跡南側と南門の調査を実施。前者は遺構が確認されず。後者は池南岸から約80m南で径36cm程の柱2本で構成された門を確認。双方の柱の間隔は4.5mを測る。また、貝形柱の可能性のある15cm角の柱を確認した（整備事業3次調査）。
7	平泉町教育委員会	復元整備	S510913～1014	414	・北西部を対象に調査を実施し、西門跡を確認。桁行1間(4.8m)、梁間2間(3.6m)の四脚門で、主柱は掘立柱、袖柱は礎石で構成されることを確認（整備事業4次調査）。
8	平泉町教育委員会	復元整備	S521011～1203	1,410	・西門跡と大阿弥陀堂跡との間及び池跡南側と西側土塁脇を対象に調査を実施。前者は遺構が確認されず、後者からは桁行10間(27.5m)、梁間2間(4.6m)の掘立柱建物を確認。四周に雨落溝が廻る。『吾妻鏡』に記載のある車宿の遺構と確認（整備事業5次調査）。
9	平泉町教育委員会	水道更新 道路整備	H070127～0228 0821～1020	180	・町道舞鶴池線の舗装、水道工事に先立つ発掘調査。 ・近世末～近代にかけての瓦窯跡1基、瓦と窯道具の廃棄土坑1基、陶器窯道具が出土した近代以降の溝跡3条が確認された。
10	平泉町教育委員会	内容確認	H301029～1203	185	・観自在王院跡の南側を区画する堀跡や造営時の整地層とともに、堀跡南から、毛越寺及び観自在王院跡の南に隣接する東西大路の北側の側溝を検出したが、堀と若干方向が異なっていた。
11	平泉町教育委員会	内容確認	R011031～1209	125	・観自在王院跡の西側を区画する土塁跡を確認したが、南西隅付近は攪乱が著しく区画施設は失われていた。 ・西側の区画施設は版築とはいえない盛土で構成されており、築地堀というよりは土塁に近いと考えられる。
12	平泉町教育委員会	内容確認	R021120～R030325	125	・観自在王院南西側を対象の調査を行い、溝2条、南北方向の石敷、根石の可能性のある集石、柱穴を確認した。12SD2は11次調査で確認した11SD2の続きと考えられる。石敷はSD2と重なるものの溝が途切れていることから、通路と考えられる。
13	平泉町教育委員会	内容確認	R030902～1118	170	・車宿、溝跡、南北方向の石敷、柱穴を確認した。車宿は昭和52年の調査で確認されており、北から5番目の柱（S68.1ライン）の再調査を行い、柱の状況を確認した。車宿の柱は径30cmと太く、残存状況は良好で柱の通りも良いことを確認した。なお、柱の樹種は、自然科学分析の結果クリと同定された。

参考文献

藤島亥治郎1961 『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』（1～3次）

平泉町1979 『観自在王院跡整備報告書』（4～8次）

平泉町教育委員会2020 『名勝旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅰ』岩手県平泉町文化財調査報告書第135集（10次）

平泉町教育委員会2021 『名勝旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅱ』岩手県平泉町文化財調査報告書第139集（11次）

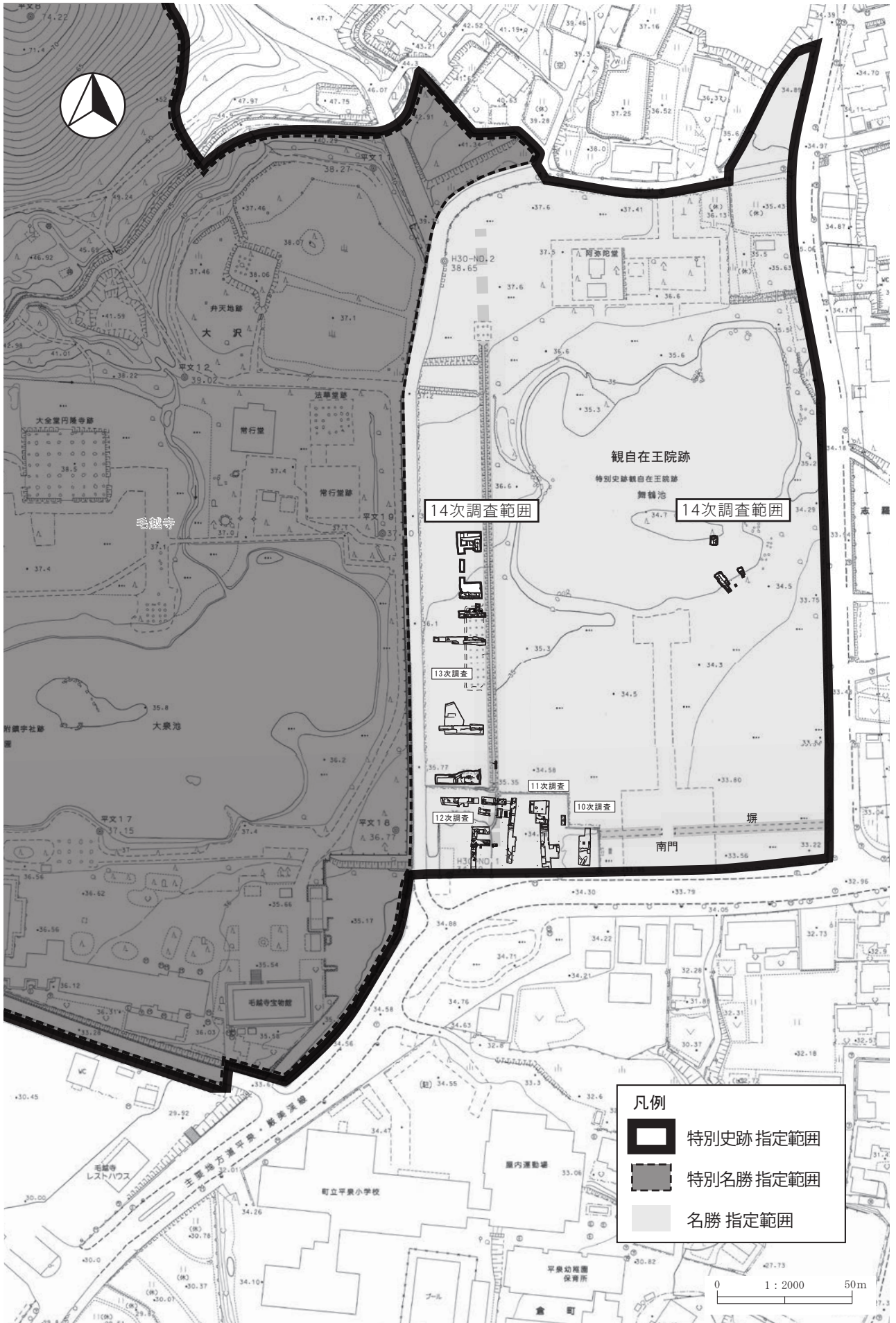
平泉町教育委員会2022 『名勝旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅲ』岩手県平泉町文化財調査報告書第142集（12次）

平泉町教育委員会2023 『名勝旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅳ』岩手県平泉町文化財調査報告書第145集（13次）

Ⅱ 調査の概要

1 調査目的

将来的な史跡南西側整備を目指した内容確認調査で、今年度が5年目にあたる。観自在王院跡はこれまで、平泉遺跡調査会・平泉町教育委員会によって今回の調査を含め14回の調査が行われてきている。14次調査は、観自在王院跡西側の南北道路と、舞鶴が池の南東側を対象に調査を行った。



第3図 親自在王院跡第14次調査位置図

なお、観自在王院跡整備報告書において整備事業における第1～5次の発掘調査報告がされているが、昭和29～31年度に実施された平泉遺跡調査会の発掘調査が先行して行われていることから、遺跡調査会の調査を1～3次とし、整備事業の調査を4～8次調査としてカウントした。

2 調査方法

グリッド 今回の再調査に併せて観自在王院跡の周辺に基準点を打設し、遺構実測や遺物出土地点の記録等の実測作業の基準とした。

なお、平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震において、調査区周辺では西北西方向に約20cm、平成23年3月11日に発生した東北太平洋沖地震によって、南南東へ約2.7mずれていることが確認された。よって、今回の基準点の数値は、周辺の調査成果との整合ができるよう変動前の数値（測地成果2000）に変換した測量成果を使用している。

粗掘・検出 遺構検出面まではスコップもしくは移植ベラで表土層を剥ぎ、遺構や層位の確認を進め、鋤簾等で遺構検出作業を行った。ただし、昭和の整備で施された玉石敷や攪乱は重機によって剥いでいる。

精査 基本的には検出に留めた。ただし、遺構の年代・層序等を確認するため部分的にサブトレンチを入れ、断面観察を行った。

遺構名 複数次にまたがる遺構があることから、12次調査1号溝であれば12SD1のように遺構略号の前に次数を表記し判別できることを原則としたが、5次調査において「車宿」、「西側溝」の遺構名で調査されたものについては、5次調査の表記を踏襲している。

記録 遺構の実測は、光波・平板測量もしくはグリッドを1×1mに分割したメッシュを用いて測量した。遺構写真は35mm版カメラとデジタルカメラ（ニコンD90）をメインカメラとし、遺構及び調査全景写真時には、メインカメラに加えて6×7版カメラ（リバーサル）で撮影を行った。

埋め戻し 山砂で遺構面を覆い、その上に調査で掘削した土を埋めた。

普及活動 現場は随時公開し調査に支障がない範疇で説明等を行い、調査終盤の令和4年11月26日に現地説明会を開催した。調査成果は、「広報ひらいずみ」等で公表している。

Ⅲ 調査成果

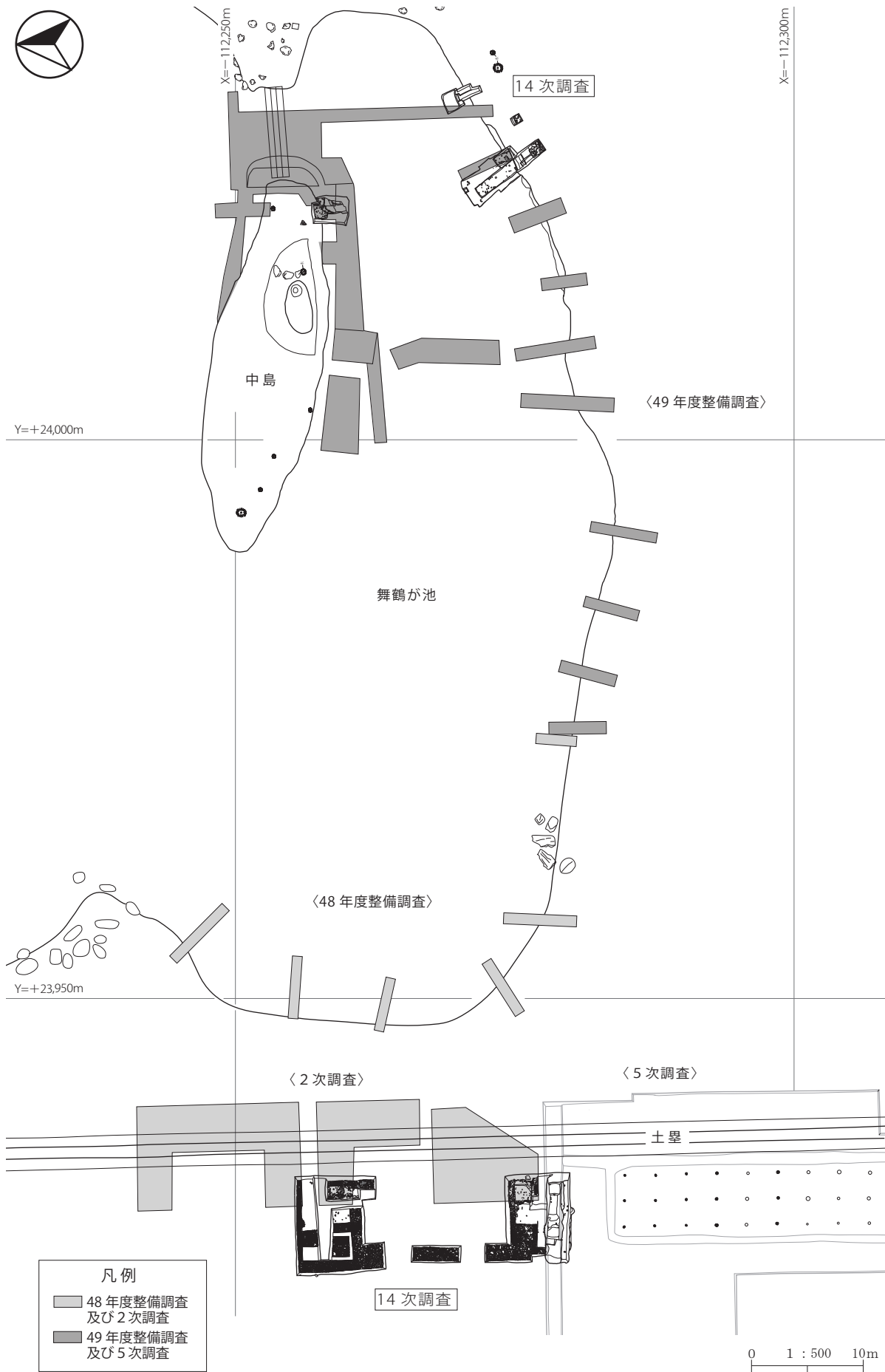
1 検出遺構

(1) 調査概要・経過

14次調査は毛越寺と観自在王院跡との間の道路跡の再調査、舞鶴が池南東側の護岸状況の確認を目的としていたため、調査区は大きく2か所に分かれている。

道路跡は観自在王院西側に沿って、南北方向に延びている。13次調査では道路跡中央東よりで確認された車宿の再調査を行っており、14次調査ではこの北側を中心に3地点設定した。範囲は南北25m、東西9mで、調査区名を14-1（北側）、14-2（南側）、14-3（中央）とした。調査区周辺は昭和整備時において玉石を敷き石敷路面を表現している。そのため調査時には整備の石敷やその下の整備時の盛土・旧表土等を掘削し、観自在王院当時の石敷面にたどりついた。14-2では8次調査において深堀されたトレンチを再調査し観自在王院造営時の整地状況を確認した。14-1と14-2の東寄りでは2次調査区の痕跡を確認することができた。14-1～3では玉石が敷き固められた12世紀の石敷道路跡の状態を確認し、周辺にも良好な状態で石敷が続く様子が窺えた。

池側の調査区は14-4～7の4地点である。14-4・6・7は舞鶴が池の南東側岸に沿った箇所で、



第4図 観自在王院跡調査位置関係図

西から14-4・7・6と並んでいる。14-4では観自在王院の12世紀の整地面を池岸から池底にかけて検出し、また昭和49年に行われたレンチ調査の痕跡を検出した。14-6では同様に12世紀の池底を、14-7では岸の一部を確認することができた。14-5は中島の南東側の一角で、12世紀の整地上に石が敷かれた状態を確認した。昭和整備の際に調査を行っており、池側は深く掘り込みがされていたため、岸の立ち上がりを確認することができなかった。

今回の調査では、整備されてから40年以上が経過した舞鶴が池の現状も確認することができた。池には流入した土砂や、整備護岸が崩落した土砂が堆積した状態である。調査時には調査区周辺を土嚢を積んで囲み、池の水の流入を防止するようにしたが、水の流入は途絶えることはなく、排水作業に追われながらの調査となった。

昭和の整備では汀線を中心に幅約2m程玉石を敷いて州浜を形成している。この州浜に用いた石は時間の経過とともに徐々に池底に向かって崩れ、岸の一部も崩壊している様子が窺えた。

2 調査概要

検出は、整地層（14-2・4～7調査区）、石敷道路跡（14-1・2・3調査区）、池岸（14-4・5調査区）、池底（14-4～6調査区）、集石（14-4・7調査区）、溝跡（14-4調査区）である。ここでは調査区毎に調査結果を記載し、後に遺構についてまとめて述べることとする。

14-1調査区（第6図、写真図版2～5）

石敷道路側の調査区では一番北側にあり、車宿の北端から29mの位置にある。範囲は南北8.0m、東西9.0mである。調査内に土層確認用のベルトを残している。南東側は2次調査の埋め戻し土を除去後、南北方向にトレンチを設けた。ここでは石敷直上からかわらけ片が出土した。

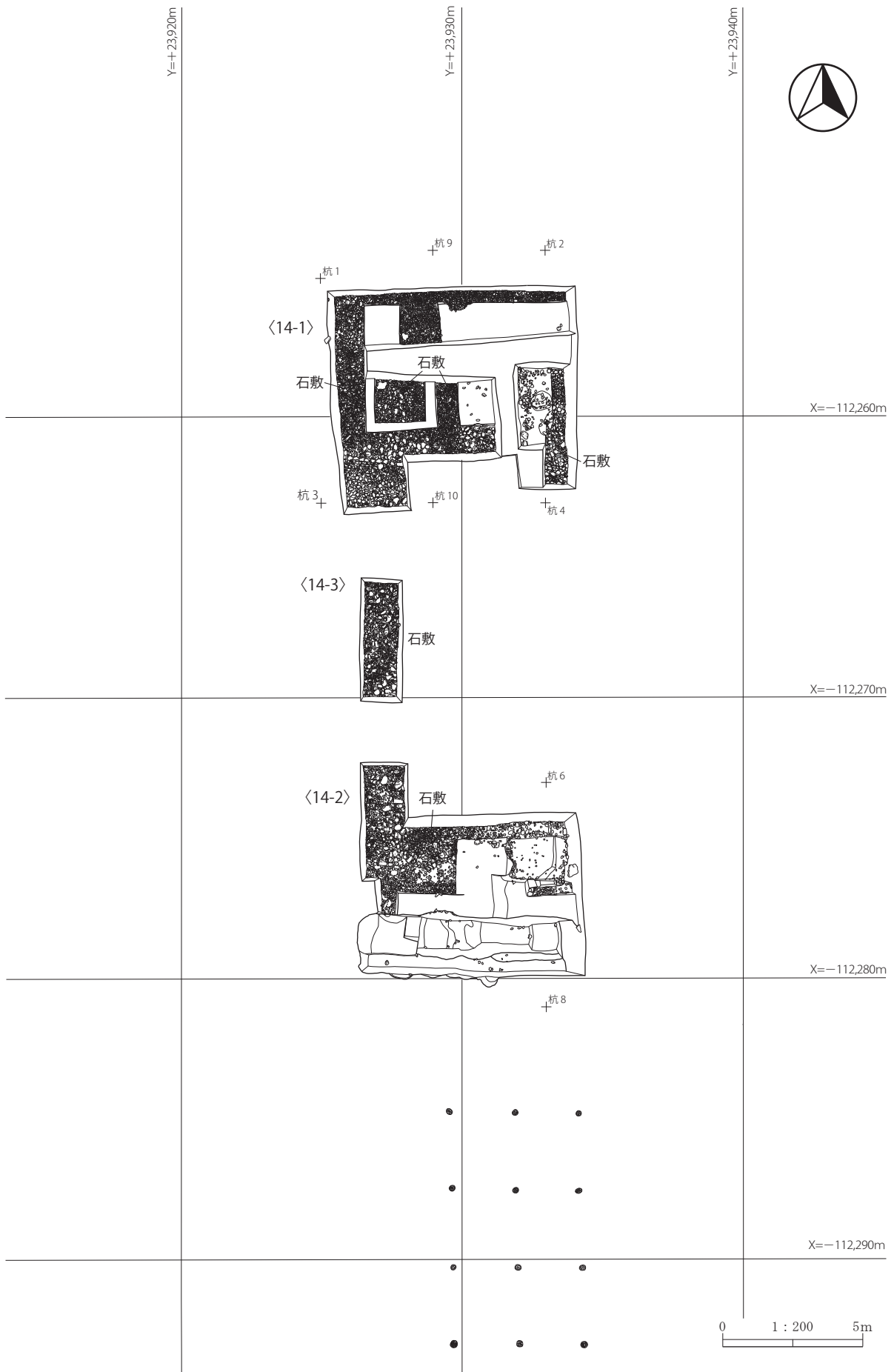
層位：昭和整備の石敷直下には整備時の盛土があり、この盛土面から12世紀の石敷面までは50～60cmの深さがある。上層は整備時の盛土で、北側に薄くあり、東側の2次調査区跡では調査時の埋め戻し土の上に10～20cm程度の厚さで盛られていた。この盛土層の下には旧水田層が2時期あり、下の水田層は鉄分を多く含んでいる。層厚は両方合わせて15～20cm程度である。旧水田層の下層は砂を多く含み粘土塊等もないことから自然堆積層と思われる。鉄分や炭も含まれている。この層は北側の断面7-8では7層で、厚さ10～15cm程度である。西側の断面13-14では10層に対応し南に向かい下がっている。南端では10層と11層が類似しており、同一層である可能性がある。10層下の12・13層は混じりの少ない層で、人為堆積か自然堆積なのか判断が難しい。過去の2・8次調査では、土に石を混ぜた舗装道路と判断した層である。西側では、石敷直上に外れたと思われる浮いた状態の石を確認しているが、石敷上層の灰黄褐色土に故意に混ぜている状態ではないと思われる。石敷の直上には所々で砂が堆積している。

石敷の下は調査していないが、14-2と同じ様に観自在王院造営時の整地層があると考えられる。

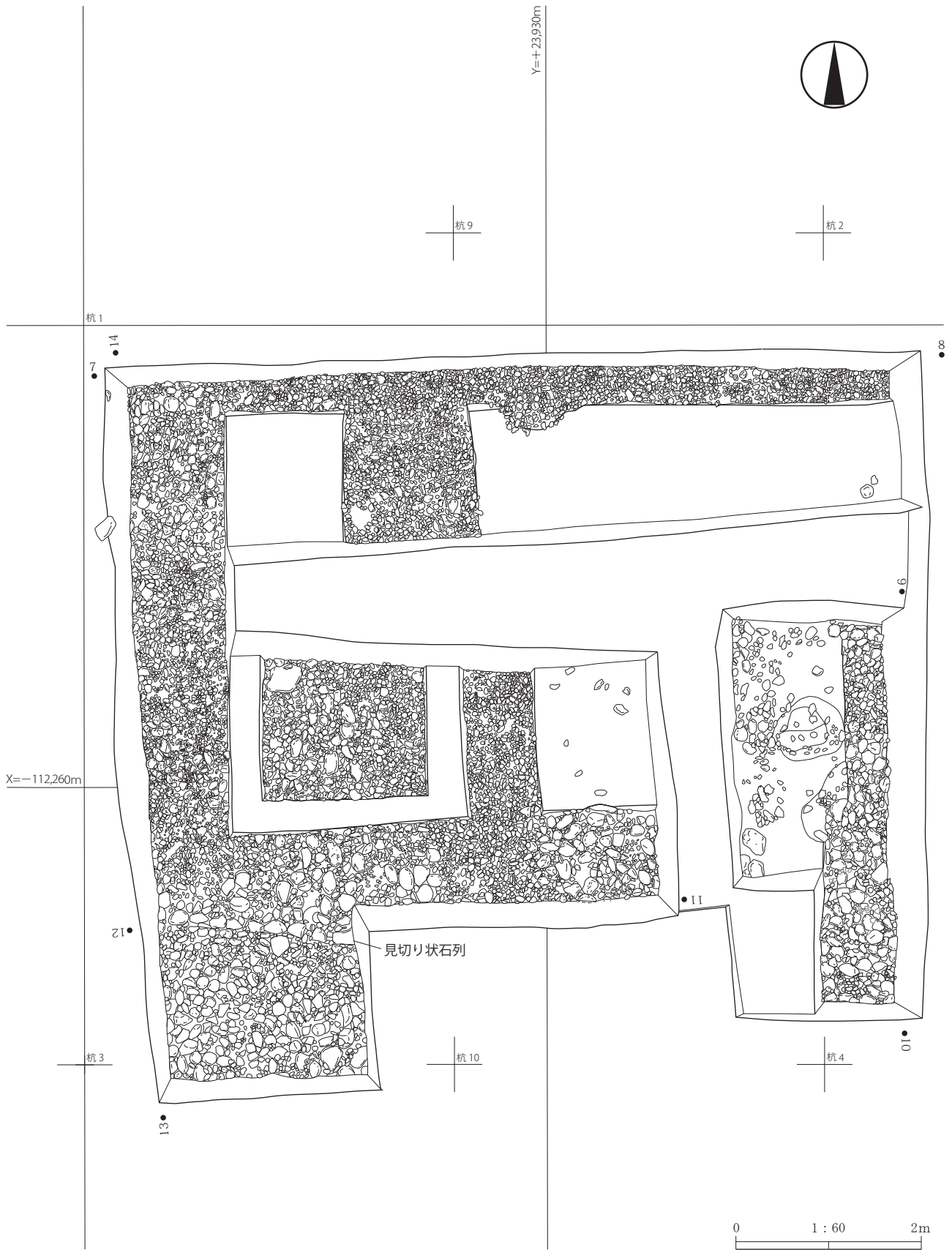
石敷：石敷面は14-1全体に広がっている。石の大きさは3～30cm大で、北側と中央が3～7cm大を中心とした細かい石が使われている。西側は5～15cm大、南側に15cm大の石が多く使われ、25cm大の石も混じる。場所により濃淡はあるものの、石の大きさや配置について規則性は無く、ばらつきがある状態である。

石敷は、石と石の間は隙間を設けない様に固められている。部分的に石が失われていた箇所もあり、砂が堆積している。大きい石同士の間では隙間が生じ、隙間には粘土と砂が混じっている。混じった砂は他の層と比べて粗い傾向があった。

石敷面は、北から南に、西から東に向かうにつれて低くなり、標高が一番高い北西隅で35.80m、南西で35.69mを測る。直線距離は7.5mで、高低差が11cmである。調査区北辺では東端で標高35.65

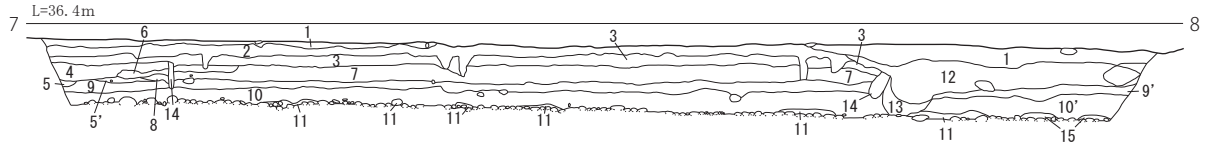


第5図 14次調査位置図 (14-1 ~ 3)



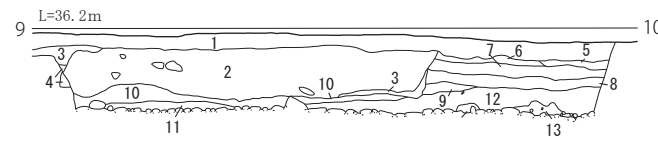
第6図 14-1 平面図

14-1



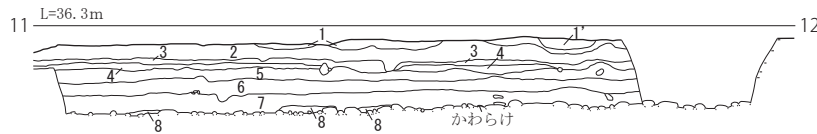
7-8

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 5Y5/1灰シルト 10YR7/8黄橙粘土ブロック混入 | 9 2.5Y6/3にぶい黄粘土 鉄分含 |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄粘土 10YR5/2灰黄褐粘土、鉄分含 | 9' 5Y6/2灰オリブ粘土 砂、鉄分含 |
| 3 2.5Y4/2暗灰黄粘土 10YR5/2灰黄褐粘土、鉄分含 (水田層鉄分集積) | 10 2.5Y6/3にぶい黄粘土 鉄分多く含 |
| 4 5Y5/1灰シルト 砂含 | 10' 5Y6/3オリブ黄粘土 鉄分少量含 |
| 5 2.5Y6/2灰黄砂 鉄分含 | 11 10YR6/2灰黄褐砂 鉄分含 |
| 5' 2.5Y6/2灰黄砂 鉄分、炭含 | 12 2.5Y4/2暗灰黄粘土 10YR5/2灰黄褐シルト混入 |
| 6 2.5Y5/3黄褐粘土 鉄分、炭化物多く含 | 13 2.5Y5/2暗灰黄粘土 |
| 7 2.5Y4/2暗灰黄粘土 砂、鉄分、炭化物含 | 14 10YR4/2灰黄褐粘土 (杭跡) |
| 8 2.5Y4/2暗灰黄シルト 2.5Y6/3にぶい黄粘土ブロック混入 | 15 5Y6/2灰オリブ粘土 砂多く含 |



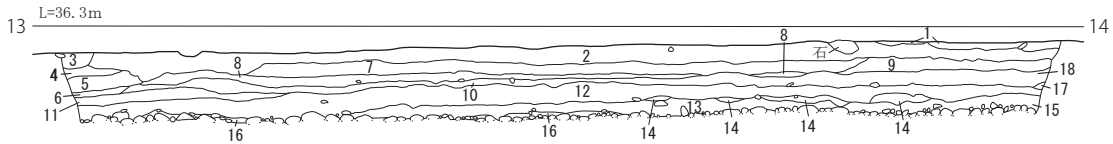
9-10

- | | |
|---|----------------------------|
| 1 2.5Y4/3オリブ褐シルト 2.5Y3/1黒褐、2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック混入 鉄分含 | 4 2.5Y5/2暗灰黄粘土 鉄分含 |
| 2 7.5Y3/1オリブ黒砂 砂塊(埋土) | 5 10YR4/2灰黄褐粘土 鉄分少量含 (水田層) |
| 3 2.5Y5/3黄褐粘土(埋土) | 6 2.5Y5/2暗灰黄粘土 砂、鉄分多量含 |
| | 7 2.5Y5/3黄褐粘土 砂、鉄分含 |
| | 8 2.5Y5/2暗灰黄粘土 鉄分含 |
| | 9 2.5Y6/2灰黄粘土 砂多量、鉄分含 |
| | 10 5Y6/2灰オリブ粘土 粘性強 砂少量、鉄分含 |
| | 11 5Y6/2灰オリブ粘土 砂含 |
| | 12 2.5Y6/2灰黄粘土 鉄分含 |
| | 13 10YR5/2灰黄褐粘土 砂、鉄分含 |



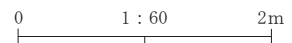
11-12

- | | |
|--|--|
| 1 10YR4/6褐粘土 10YR2/3黒褐粘土ブロック混入 鉄分含(埋土) | 6 2.5Y5/3黄褐粘土 中央に帯状に10YR5/2灰黄褐粘土ブロック混入 2~3mmの塊状で鉄分、炭化物含 |
| 1' 5Y5/2灰オリブ砂、砂ブロック(埋土) | 7 2.5Y6/2灰黄褐粘土 中央に帯状に10YR5/2灰黄褐粘土ブロック混入 2~3mmの塊状で鉄分、炭化物含 |
| 2 10YR5/3にぶい黄褐シルト 鉄分、炭化物少量含(水田層) | 8 10YR4/6褐砂 所々に2.5Y6/1黄灰粘土ブロック混入 |
| 3 10YR5/6黄褐粘土 (水田層鉄分集積) | |
| 4 2.5Y4/2暗灰黄粘土 砂多量、鉄分含 | |
| 5 2.5Y4/3オリブ褐粘土 砂、鉄分、炭化物少量含 | |

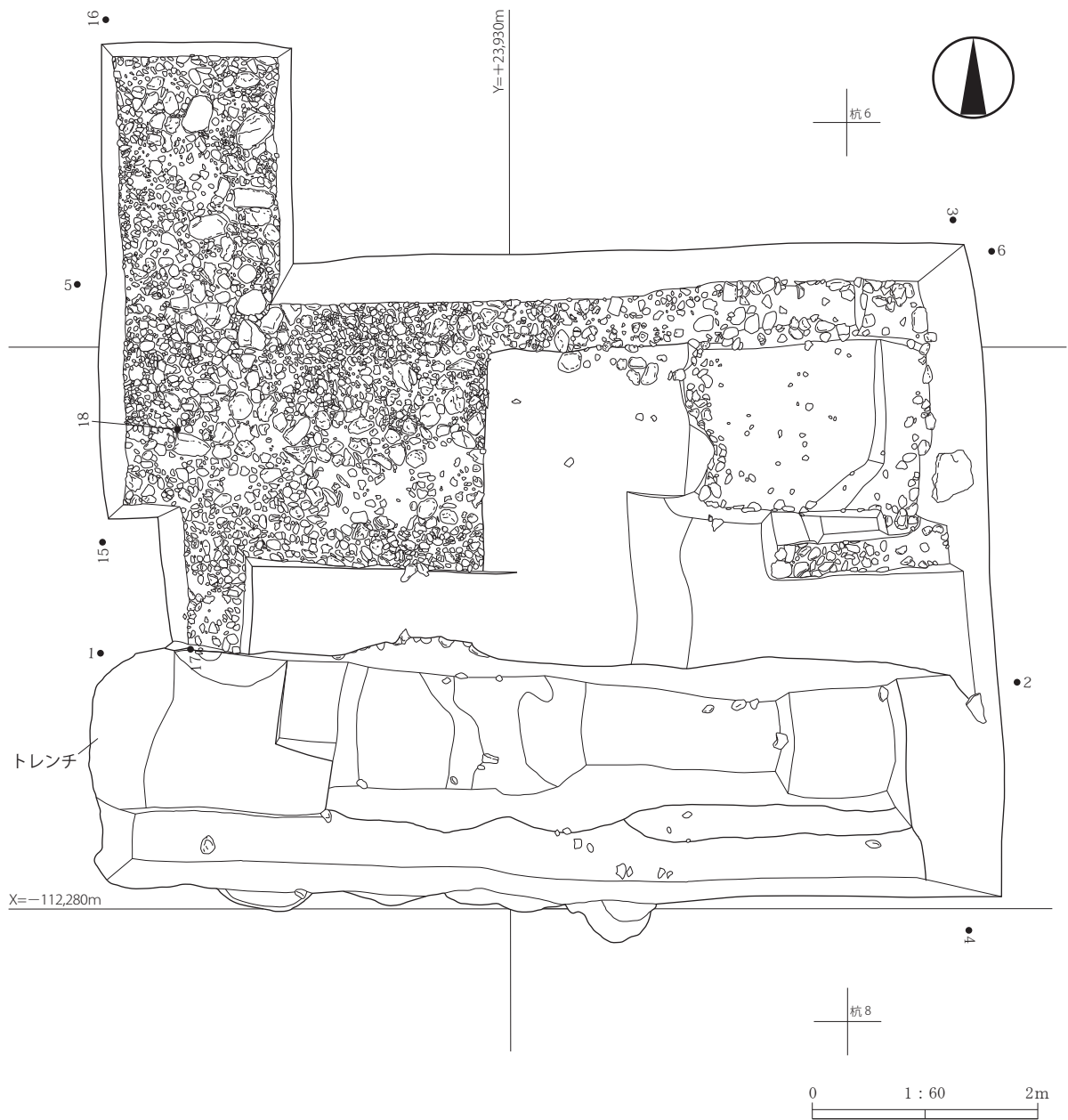


13-14

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 2.5Y6/4にぶい黄粘土 砂、鉄分、小礫含(埋土) | 10 5Y5/1灰粘土 砂多量、鉄分、炭化物含 |
| 2 10YR5/3にぶい黄褐シルト 砂、鉄分含(水田層) | 11 2.5Y4/2暗灰黄粘土 鉄分含 |
| 3 5Y4/1灰粘土 砂含(水田層鉄分集積) | 12 2.5Y6/2灰黄粘土 上層に鉄分多く含 |
| 4 10YR5/2灰黄褐粘土 砂含 | 13 2.5Y6/2灰黄粘土 砂、鉄分少量含 |
| 5 2.5Y4/2暗灰黄粘土(水田層) | 14 2.5Y6/2灰黄粘土 砂多量、鉄分含 |
| 6 2.5Y4/6オリブ褐粘土 | 15 2.5Y6/2灰黄粘土 |
| 7 5Y4/1灰シルト 2.5Y4/2暗灰黄シルト混入 砂含(水田層) | 16 2.5Y5/3黄褐粘土 10YR5/6黄褐粘土少量、小石、砂、鉄分含 |
| 8 10YR4/6褐粘土 砂含 鉄分多く含(水田層) | 17 2.5Y6/2灰黄砂 鉄分含 |
| 9 5Y4/2灰オリブシルト 砂含(水田層) | 18 5Y5/1灰粘土 砂、鉄分、炭化物含 |

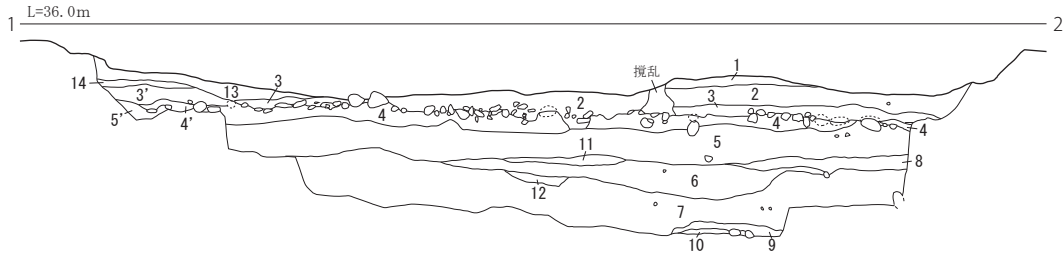


第7図 14-1 断面図



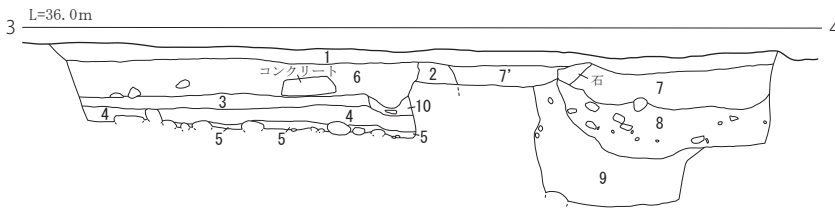
第8図 14-2 平面図

14-2



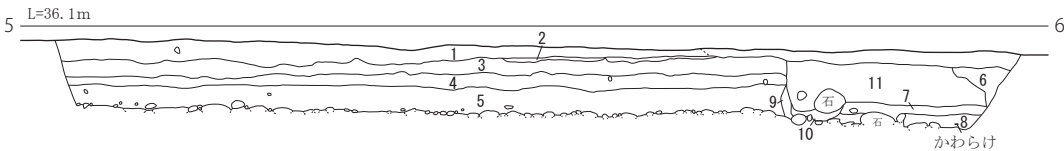
1-2

- | | |
|--|--|
| 1 2.5Y4/2暗灰黄粘土 鉄分含(水田層) | 7 2.5Y6/6明黄褐砂 2.5Y3/2黒褐粘土、5Y6/4オリブ黄粘土ブロック混入 |
| 2 10YR5/4にぶい黄褐粘土 鉄分多く含(水田層) | 8 2.5Y4/1黄灰粘土 10YR5/6黄褐砂が層状に堆積 |
| 3 10YR5/4にぶい黄褐粘土 粘性強 鉄分含 炭少し混入 | 9 10YR3/1黒褐粘土 粘性強 |
| 3' 2.5Y5/4黄褐粘土 | 10 2.5Y5/6黄褐砂 |
| 4 2.5Y6/6明黄褐粘土 2.5Y6/4にぶい黄砂混入 | 11 2.5Y5/3黄褐砂 1~2cm大の小石多く含 流水跡か |
| 4' 2.5Y4/6オリブ褐粘土 鉄分含 | 12 2.5Y6/6明黄褐砂 2.5Y3/2黒褐粘土、5Y6/4オリブ黄粘土ブロック混入 小石多く含 |
| 5 2.5Y6/4にぶい黄砂 5Y6/4オリブ黄、10YR5/2灰黄褐粘土ブロック混入 上位は鉄分含がやや均一な感じの層 1~5cm大の小石混入 | 13 2.5Y4/3オリブ褐シルト~砂 |
| 5' 2.5Y5/4黄褐粘土 小石、砂粒含 | 14 5Y4/1灰シルト |
| 6 5Y6/4オリブ黄砂 7層より粗い 小石、2.5Y6/4にぶい黄粘土ブロック混入 | |



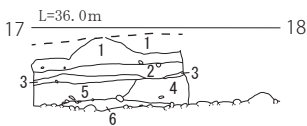
3-4

- | | |
|---|---|
| 1 2.5Y5/3黄褐シルト 10YR5/2灰黄褐、10YR7/8黄橙粘土、砂、石混入 | 7' 埋め土 石は少ない |
| 2 2.5Y5/3黄褐粘土(水田層) | 8 2.5Y4/2暗灰黄シルト 2.5Y6/6明黄褐砂ブロック 2.5Y4/2暗灰黄粘土ブロック、砂混じる(埋土) |
| 3 2.5Y5/4黄褐粘土 砂少量、鉄分多量、炭化物少量含 | 9 2.5Y4/1黄灰、2.5Y5/4黄褐粘土ブロック 2.5Y4/1黄灰粘土ブロック、腐植土混じる(埋土) |
| 4 2.5Y5/4黄褐粘土 粘性強 鉄分含 | 10 2.5Y4/2暗灰黄粘土 2.5Y4/4オリブ褐粘土、5Y6/2オリブ砂塊混じる(溝状) |
| 5 10Y4/1灰粘土 砂少量含 | |
| 6 5Y4/2灰オリブ砂 同塊、石、コンクリートなど含 | |
| 7 礫層 砂、石を含 | |



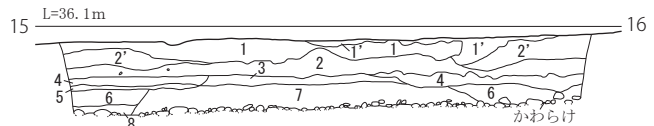
5-6

- | | |
|-----------------------------|---------------------------------------|
| 1 10YR5/3にぶい黄褐粘土 鉄分含(水田層) | 7 10Y4/1灰粘土 砂少量含 |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄粘土 粘性強 | 8 2.5Y5/4黄褐粘土 粘性強 鉄分含 |
| 3 2.5Y4/2暗灰黄粘土 砂少量含 | 9 2.5Y5/2暗灰黄粘土 11層の影響で変色 |
| 4 2.5Y5/2暗灰黄 鉄分多く含(鉄分集積層) | 10 10YR4/3にぶい黄褐粘土(溝状) |
| 5 2.5Y5/2暗灰黄粘土 砂、鉄分、炭化物少量含 | 11 2.5Y4/2暗灰黄シルト 2.5Y4/6オリブ褐粘土ブロック混じる |
| 6 5Y4/2灰オリブ砂 同塊、石、コンクリートなど含 | |



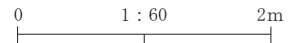
17-18

- | |
|-----------------------------------|
| 1 2.5Y4/2暗灰黄シルト 砂、鉄分少量、炭化物少量(水田層) |
| 2 2.5Y5/2暗灰黄砂 鉄分含 |
| 3 5Y4/1灰粘土 鉄分含 |
| 4 5Y5/1灰粘土 砂、鉄分含 |
| 5 5Y5/1灰シルト 砂、炭化物少量含 |
| 6 5Y6/1灰粘土 鉄分少量含 |

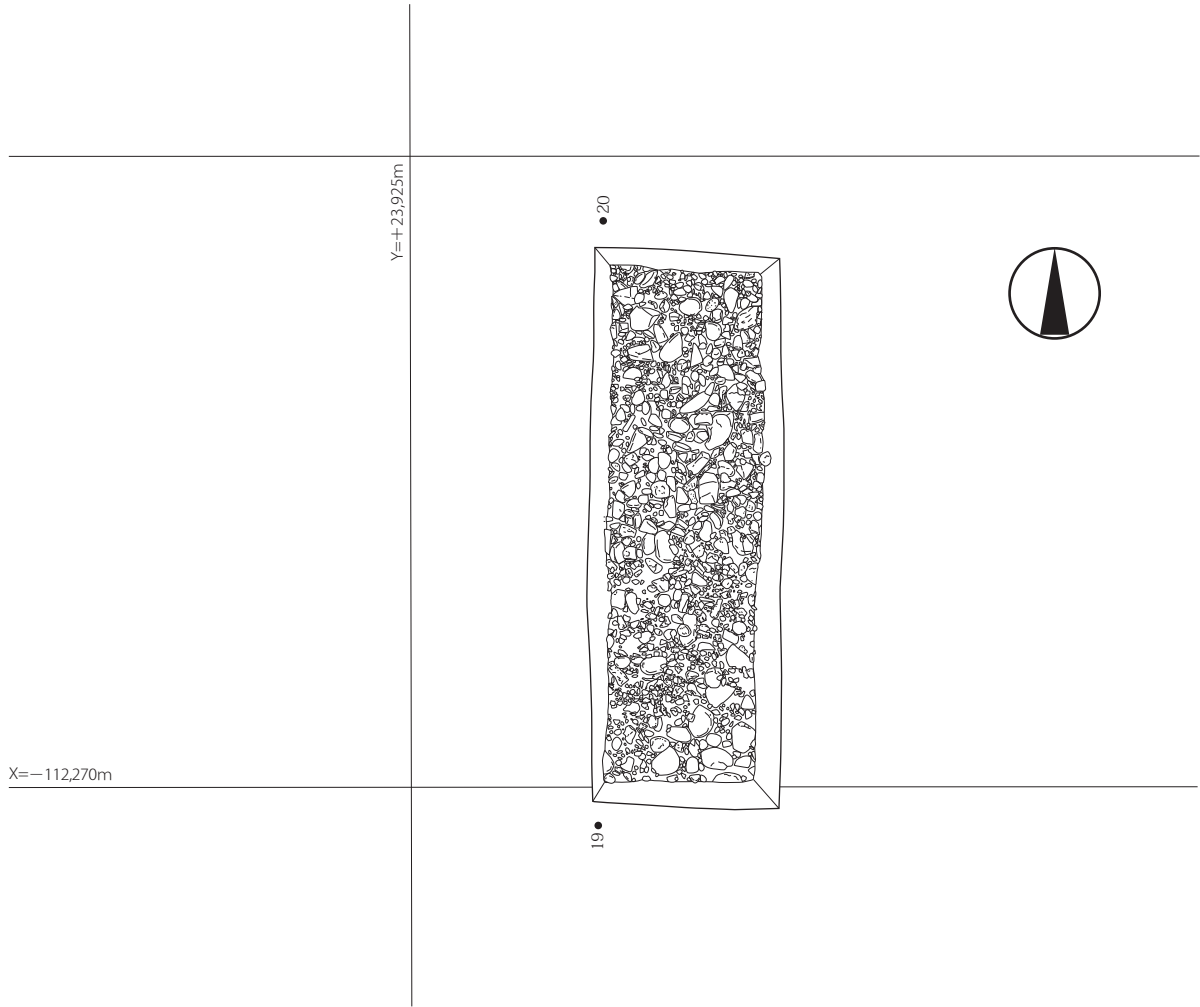


15-16

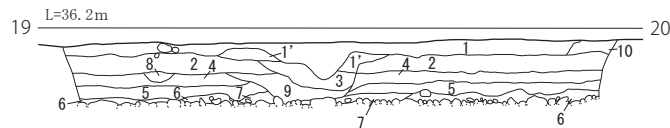
- | |
|-------------------------------------|
| 1 2.5Y5/2暗灰黄シルト 砂、鉄分含(水田層~表土) |
| 1' 5Y5/4オリブシルト 小石、鉄分多量(現代整地) |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄シルト 砂、鉄分少量、炭化物少量含 |
| 2' 5Y3/2オリブ黒粘土 2.5Y5/3黄褐粘土ブロック少量、砂含 |
| 3 5Y5/2灰オリブ粘土 鉄分多量(水田下床) |
| 4 2.5Y4/3オリブ褐粘土 砂、鉄分含 |
| 5 2.5Y4/2暗灰黄粘土 砂、鉄分含 |
| 6 5Y4/2灰オリブシルト 砂、鉄分少量含 |
| 7 2.5Y5/2暗灰黄粘土 砂、鉄分含、炭化物少量含 |
| 8 5Y4/1灰粘土 鉄分含 |



第9図 14-2 断面図

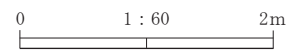


14-3



19-20

- | | | | |
|----|---|----|-----------------------------|
| 1 | 10YR4/6褐粘土 10YR4/3にぶい黄褐シルト混入 小礫含 (整備埋土) | 6 | 10YR4/6褐粘土 砂、鉄分含 |
| 1' | 5Y3/2オリーブ黒砂 2.5Y6/4にぶい黄粘土ブロック少量混入 | 7 | 2.5Y4/4オリーブ褐粘土 |
| 2 | 2.5Y3/2黒褐シルト 砂、小礫少量含 (水田層) | 8 | 2.5Y4/2暗灰黄粘土 砂多量含 |
| 3 | 5Y3/2オリーブ黒シルト 2.5Y4/4オリーブ褐粘土混入 砂、小礫少量含 (溝跡) | 9 | 2.5Y4/3オリーブ褐粘土 砂、小礫少量含 (溝跡) |
| 4 | 2.5Y4/3オリーブ褐粘土 砂、鉄分含 (水田層) | 10 | 10YR5/4にぶい黄褐シルト 鉄分含 |
| 5 | 5Y4/1灰粘土 砂含 | | |



第10図 14-3 平面図・断面図

mを測り、8.2m離れた西端から15cm下がっていた。

調査区南側には見切り状に20cm大の石が10個並んでいる箇所がある。距離は2.15mで、方向はN 83° Wを呈し、調査区外に続く。周辺の車宿や土塁とも軸方向が異なる。

14-2調査区（第8図、写真図版6）

道路側では一番南側で、南北7.5m、東西8mの調査区である。車宿北端から調査区南端で5m、北端で12.5m北に位置する。南側では南北2m、東西8mの範囲が8次調査区と重なっており、深掘トレンチが入っていた。このトレンチを利用し、石敷と整地層の状況を確認した。北東側は2次調査区と重なり、断面5-6の10層は調査時の可能性のある掘り込みで、かぎ状を呈し東壁に向かう形で2次調査区を囲っている。

層位：表土から12世紀の石敷までの堆積は50~55cmを測る。堆積状況は他の調査区と同様、上から整備盛土、旧水田層となっている。石敷と旧水田層との間は13~20cm程度ある。西側断面15-16では7層で、砂を多く含んだ状態から自然堆積層と考えられる。北側の14-3調査区では断面19-20の5層と対応すると考えられる。色調は、14-3では灰色で14-2では暗灰黄色を呈する。14-2では鉄分が多く、層厚15~20cmと厚く堆積している。土塁近くの断面3-4では3層が対応する。3層下の4層は、北の14-3調査区で薄くなる6層と対応する。北・東の断面5-6と15-16では検出していない層である。

西壁側の断面15-16と17-18の南側では、北から続いてきた7層や4層を切る様に、鉄分の少ない層が堆積している。5・6層が対応するが、この層は低い面の旧水田層と考えている。14-2調査区南半分は石敷直上まで水田の影響を受けている。8次調査区にあわせた断面1-2では石敷直上の層は同様に5・6層に対応すると思われる。東側においても鉄分や粘性の様子から旧水田層と考えられる。**整地層：**南側の8次調査区の深掘トレンチを再掘し、観自在王院建立時の整地層の確認を行った。断面1-2は石敷を断面から土層観察できる唯一の箇所である。断面西側では石の標高は35.38m、東側では35.26mである。高低差は12cm、双方の距離は5.5m離れている。大きい石は下に押し込むのではなく頭を周辺より上に出している場合がある。

トレンチの一番深い箇所で石敷から1mまで下げ、断面観察を行った。確認した下場の標高は34.3m程で、安全確保の観点から8次調査で掘削した深さまでは調査していないため、トレンチの底面は当時の埋め戻しの土である。整地層の堆積は西から東に流れ込むような様相を呈している。上層の4・5層は小石などの交じりは少なく、整地の表面を徐々に仕上げていると考えられる。

石敷：石敷に使われている石の大きさは2cm~35cm大である。大きさの差があり、そのまま石面の凹凸に影響を与えている。また石を敷いた密度であるが、14-1と比べると石と石の隙間が空いている。後世に細かい石が流出した可能性が考えられる。

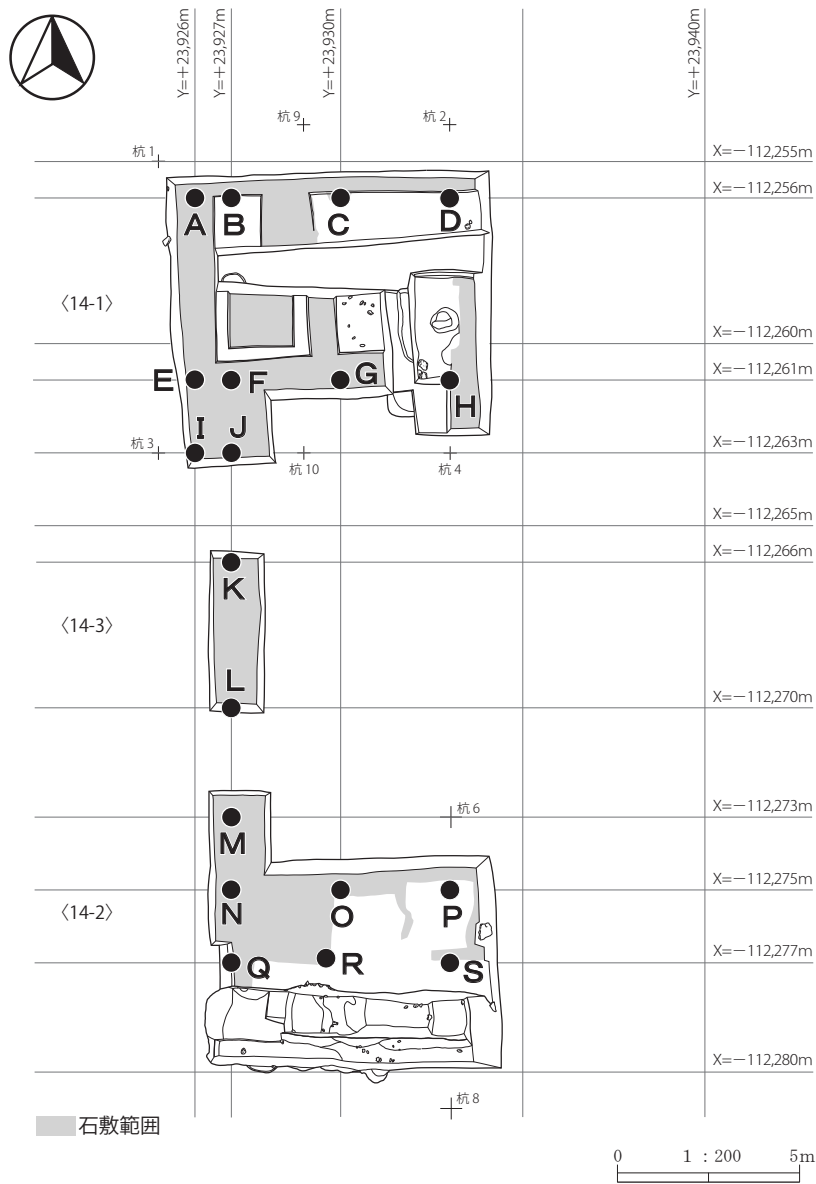
石敷面の標高は北西部で一番高く標高35.56mである。調査区の南側は8次調査区の南肩を検出して、石敷面に遺構保護の砂が敷かれた状態であった。この西側の地点では石敷の標高が35.36~35.38mである。北西と南西の高低差は18~20cmで、距離は7m程である。断面5-6では西から東に向かって石敷面を7m程確認した。標高は西側35.48m、東側35.28m、高低差20cmである。東側では断面3-4の北側は35.3m、南側では断面1-2の東側の石の高さで35.26mである。高低差は4cm、距離は3.5m程離れている。14-2調査区では14-1調査区と比べ石敷面は40~50cm程度低くなっている。

14-3調査区（第10図、写真図版7）

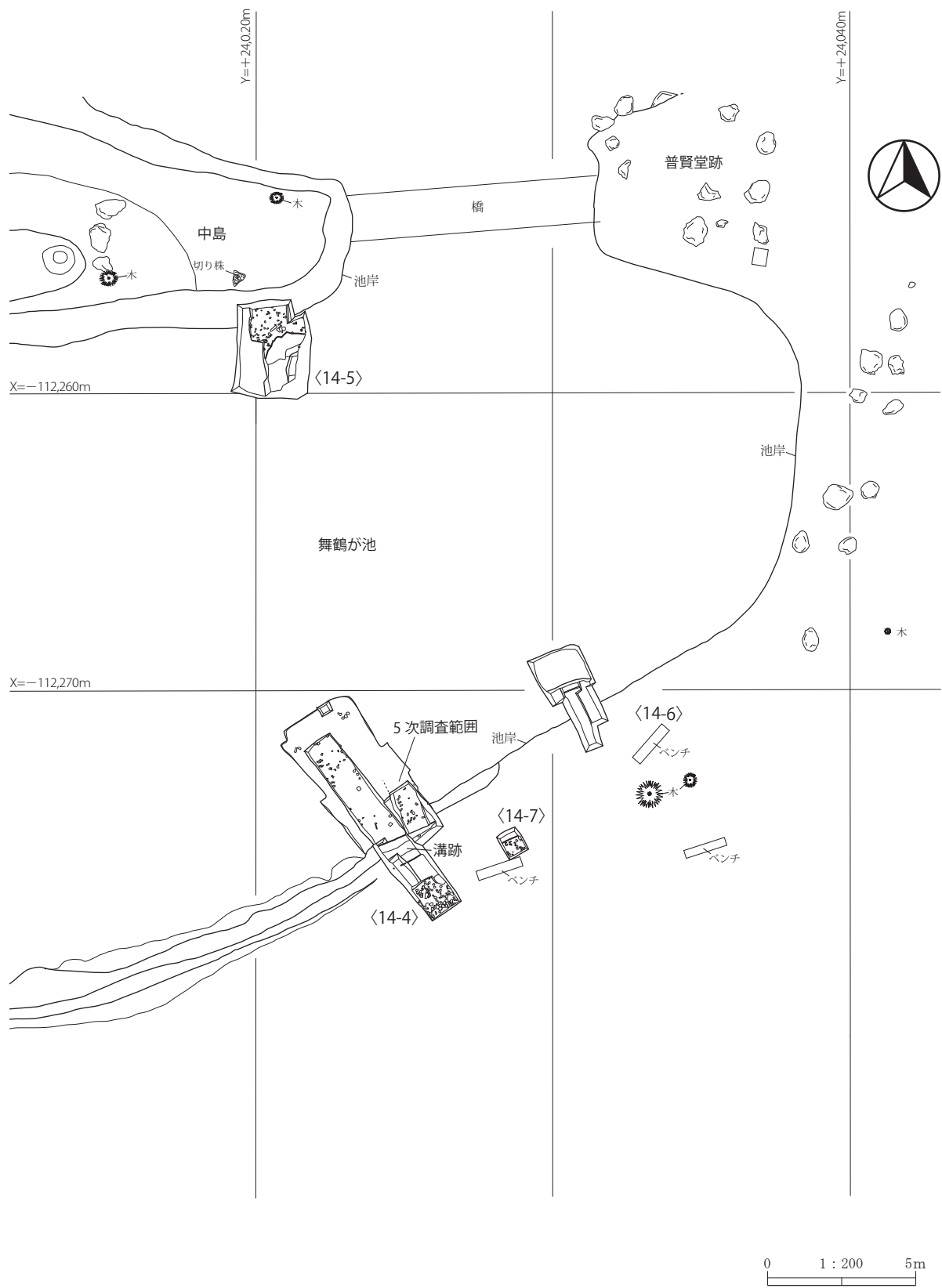
14-1と14-2の間にある南北4.4m、東西1.5mの調査区である。双方の調査区の状態を確認するため設定した。昭和整備面である石敷路面を除去し、整備盛土、旧水田層の順に掘削を進めた。中央で東西方向の溝が窪んだ状態で確認された。整備時においても溝の形状をそのままに埋め戻して

標高値(m)

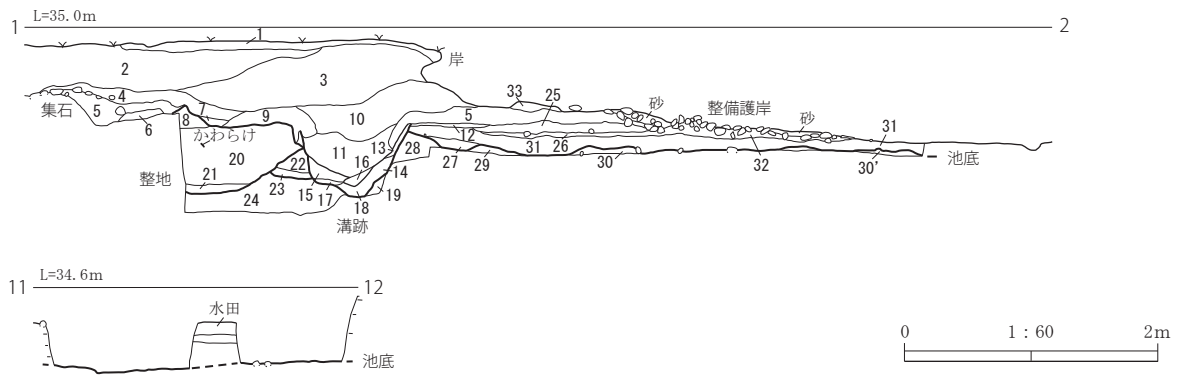
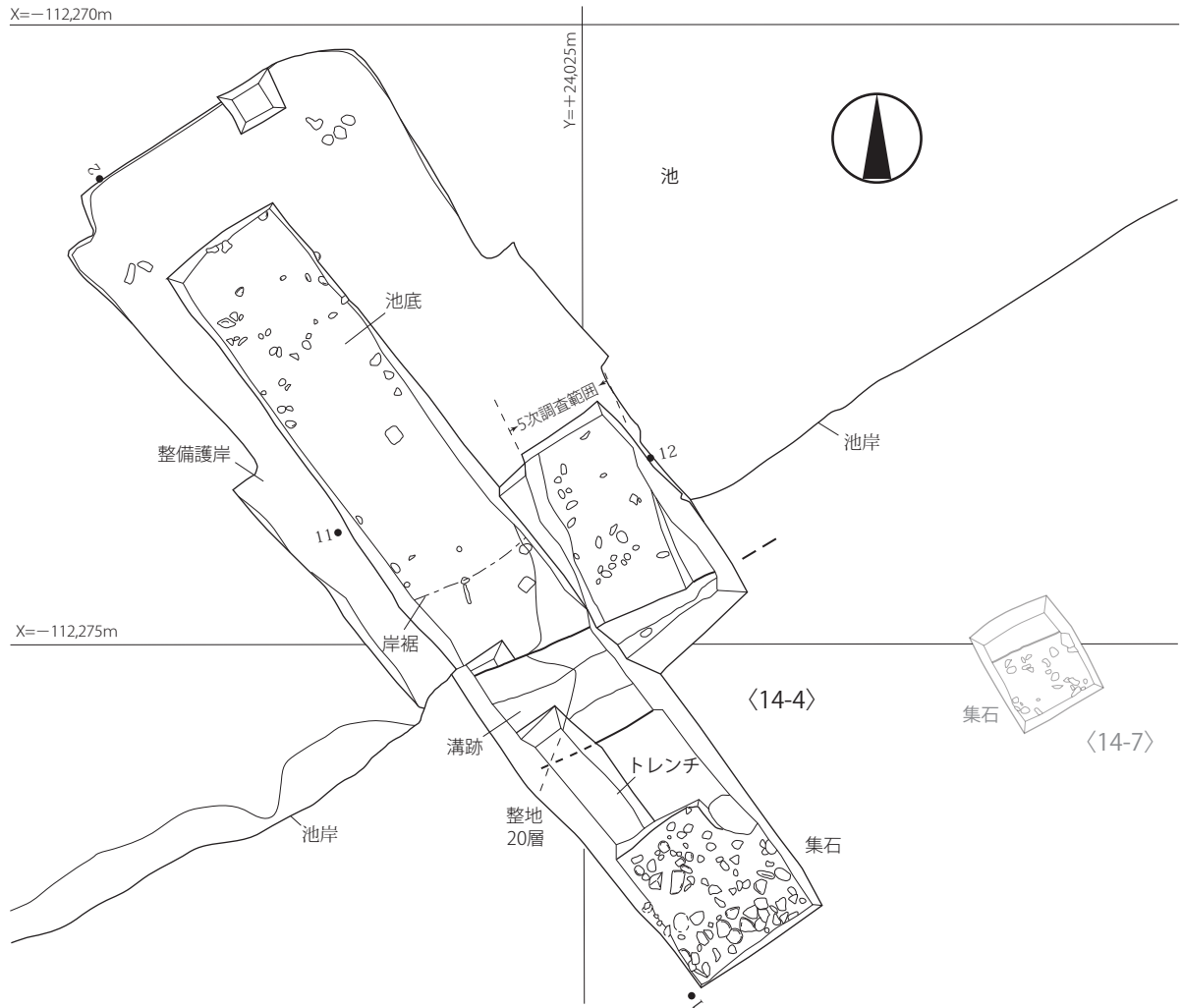
Y軸(m) X軸(m)	Y=+23,926	Y=+23,927	Y=+23,930	Y=+23,933
X=-112,256	A 35.78	B 35.77	C 35.68	D 35.65
X=-112,261	E 35.70	F 35.69	G 35.62	H 35.57
X=-112,263	I 35.69	J 35.68	—	—
X=-112,266	—	K 35.63	—	—
X=-112,270	—	L 35.60	—	—
X=-112,273	—	M 35.52	—	—
X=-112,275	—	N 35.45	O 35.44	P 35.36
X=-112,277	—	Q 35.39	R (35.40)	S 35.24



第11図 石敷測点・標高値

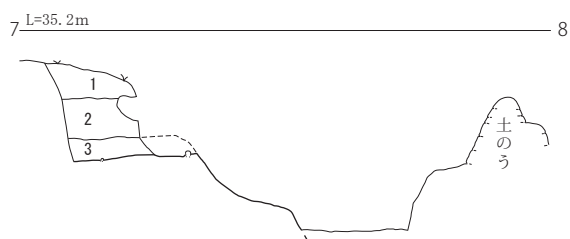
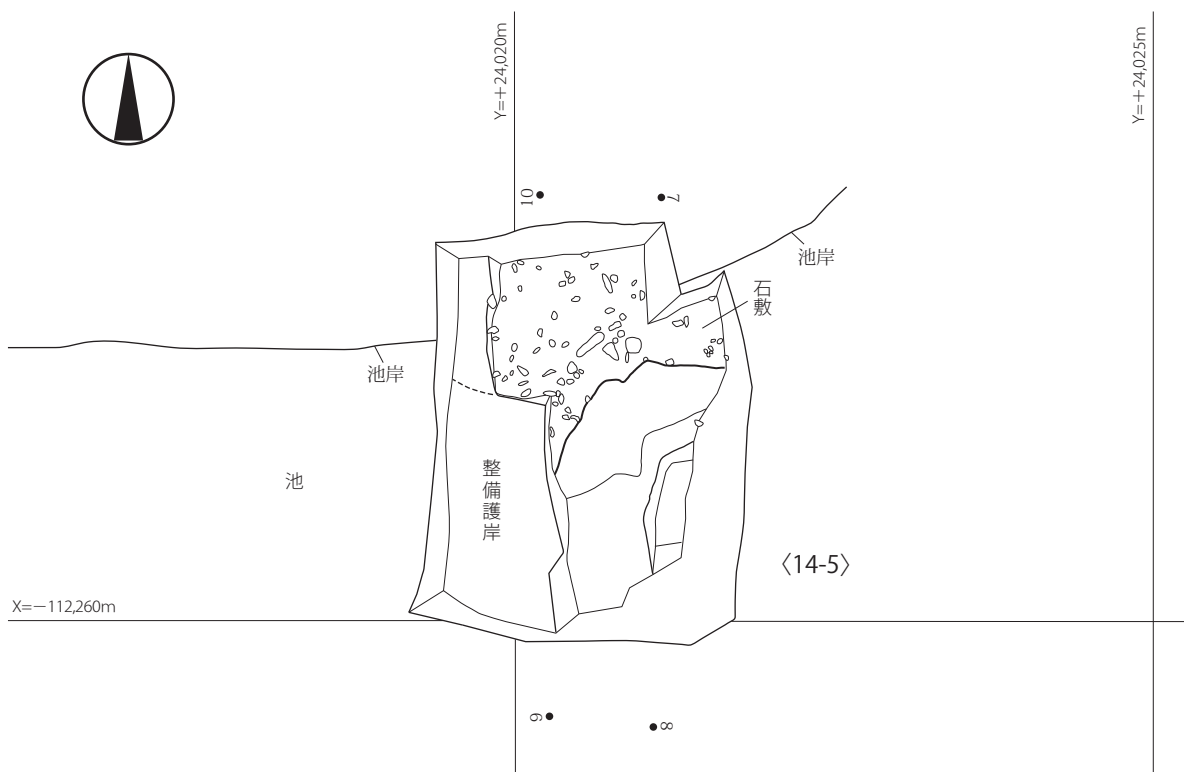


第12図 14次調査位置図 (14-4～7)

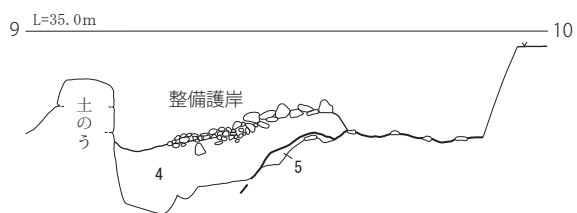


- 1-2
- | | |
|---|--|
| 1 2.5Y5/3黄褐シルト(芝、表土) | 18 5GY5/1オリーブ灰粘土 10Y3/1オリーブ黒粘土混入 砂含 |
| 2 2.5Y6/4にぶい黄シルト 小礫、岩塊含 上面に小礫敷いている(強化層) | 19 7.5GY6/1緑灰粘土 溝の影響を受けた層 |
| 3 10YR4/2灰黄褐シルト 10YR5/6黄褐粘土ブロック混入 | 20 10Y6/2オリーブ灰粘土 砂、鉄分、炭化物、かわらけ含 |
| 4 10YR5/3にぶい黄褐粘土 鉄分含(水田層) | 21 5Y6/1灰粘土 砂、炭化物少量含 |
| 5 10YR4/4褐シルト 砂、鉄分少量、炭化物含 上面に石が敷かれている | 22 2.5Y6/2明黄褐粘土 5Y4/1灰粘土の層位上に堆積 砂少量含 |
| 6 10YR5/6黄褐シルト 2.5Y6/2灰黄粘土ブロック混入 鉄分含 | 23 10Y5/2オリーブ灰砂 |
| 7 2.5Y5/1黄灰粘土(水田関連か) | 24 2.5Y5/6黄褐粘土 2.5Y4/1黄灰粘土混入 所々に炭化物含 |
| 8 10YR7/8灰黄橙粘土 砂、鉄分含 | 25 2.5Y4/3オリーブ褐粘土 砂、炭化物少量含(旧水田層か) |
| 9 2.5Y4/2暗灰黄シルト 2.5Y7/3浅黄粘土ブロック少量混入 砂、鉄、炭化物少量含(旧水田層か) | 26 2.5Y4/3オリーブ褐粘土 2.5Y5/3黄褐粘土小ブロック少量混入、炭化物多量含 しまり密 |
| 10 10YR6/8明黄褐粘土 5Y4/1灰粘土混入 砂、鉄分、炭化物、かわらけ含 | 27 2.5Y5/4黄褐粘土 炭化物、砂少量含 |
| 11 5Y6/4オリーブ黄粘土 7.5Y3/1オリーブ黒粘土混入 しまりなし(埋め土) | 28 2.5Y6/6明黄褐粘土 |
| 12 10YR4/4褐粘土 鉄分含(水田下床) | 29 2.5Y6/6明黄褐粘土 10Y4/1灰粘土混入 |
| 13 7.5GY5/1緑灰粘土 軟らかくしまりなし | 30 5GY6/1緑灰粘土 |
| 14 7.5GY5/1緑灰粘土 | 30' 5G5/1緑灰粘土 7.5Y4/2灰オリーブ砂含 |
| 15 5GY4/1暗オリーブ灰粘土 軟らかくしまりなし | 31 5GY5/1オリーブ灰粘土 10Y4/1灰粘土混入 炭化物含(整備調査埋め土か) |
| 16 5Y3/2オリーブ黒シルト | 32 2.5Y4/4オリーブ褐粘土 5mm大の砂利含 5~10cm大の石を設置 |
| 17 7.5GY4/1暗緑灰砂 | 33 2.5Y5/6黄褐粘土 7.5GY3/1明緑灰粘土ブロック混入 6層の続き様(埋め土) |

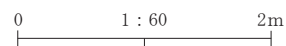
第13図 14-4 平面図・断面図



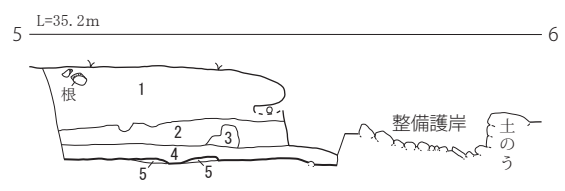
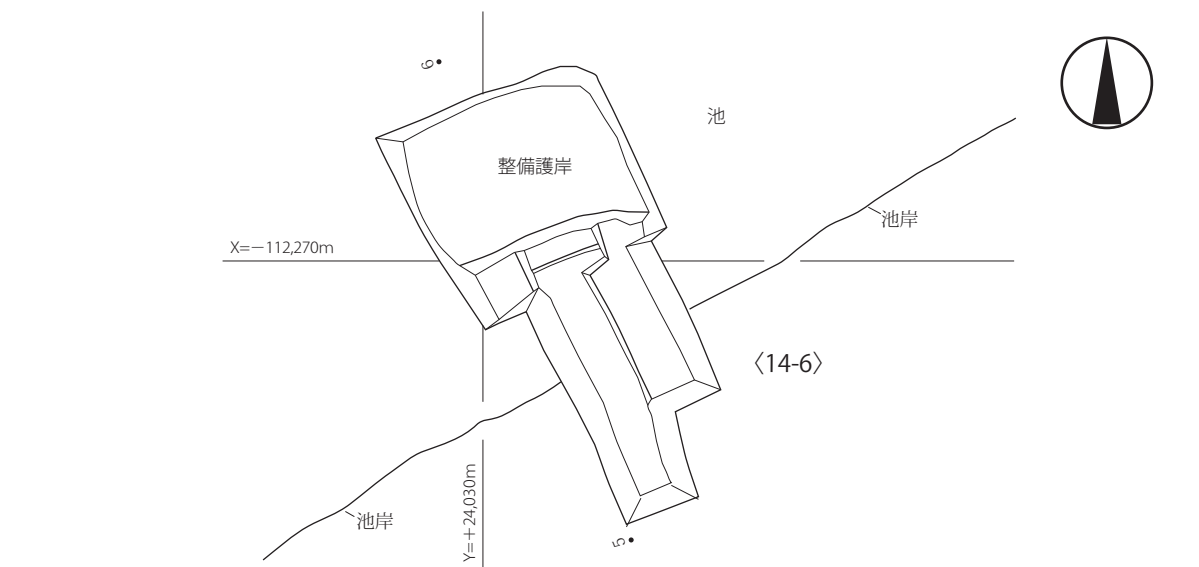
- 7-8
- 1 10YR5/3にぶい黄褐粘土 10YR5/6黄褐粘土、5Y6/2灰オリブ粘土
ブロック混入 鉄分含む
 - 2 2.5Y5/6黄褐粘土 2.5Y4/1黄灰粘土混入
 - 3 5Y3/2オリブ黒粘土 表面に植物遺体堆積 (水田層)



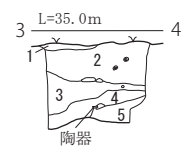
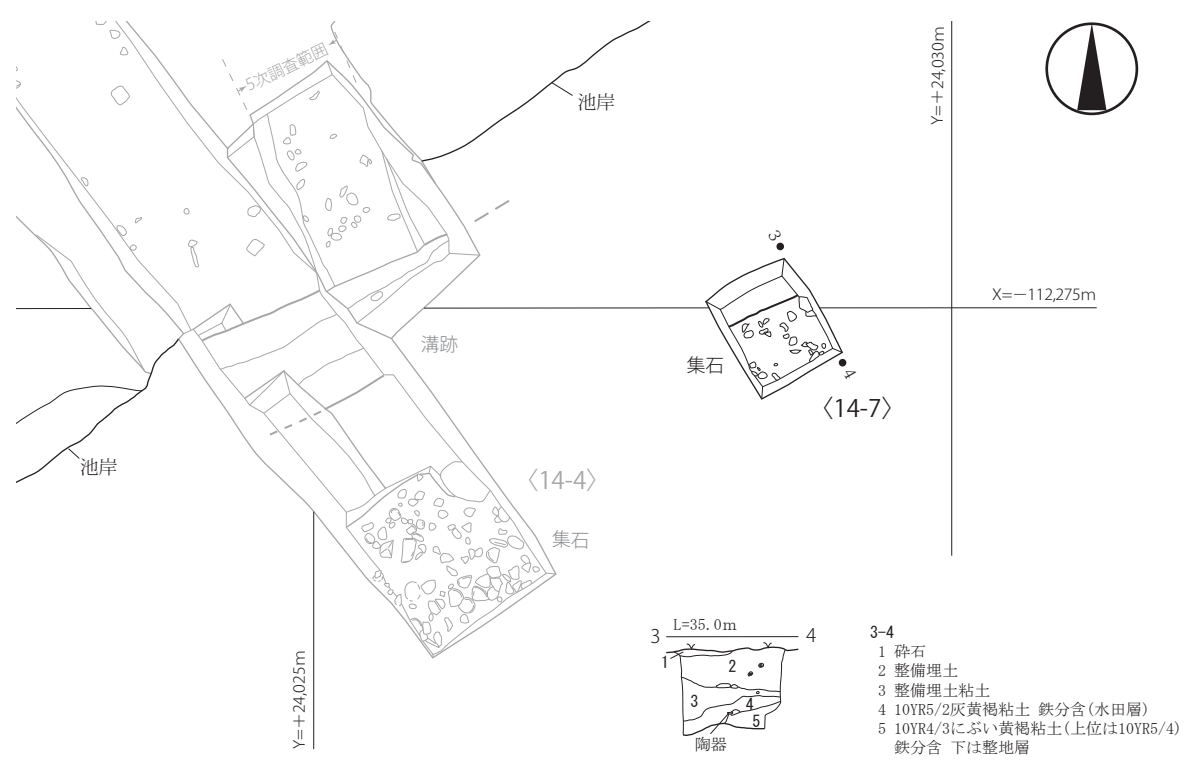
- 9-10
- 4 5Y4/4暗オリブ粘土 5Y3/2オリブ黒粘土ブロック混入
石敷周辺には 2.5Y4/2暗灰黄粘土～砂 小礫を含む
 - 5 10Y6/2オリブ灰粘土 10GY4/1暗緑灰砂混入 (整地層)



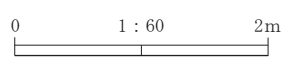
第14図 14-5 平面図・断面図



- 5-6
- 1 2.5Y5/4黄褐シルト 10YR5/6黄褐シルトブロック混入 上面に5mm大の小礫撒いている 下位は10YR5/3にぶい黄褐シルト主体 鉄分含む
 - 2 5Y4/2灰オリブ粘土 10YR4/6褐粘土ブロック混入(埋土)
 - 3 2.5Y4/4オリブ褐粘土 水分多くしまりない(根の痕か)
 - 4 5GY5/1オリブ黒粘土 鉄分、炭化物少量含む 軟らかい(水田層)
 - 5 10Y5/2オリブ灰粘土 10Y4/1灰粘土ブロック混入(整地層)



- 3-4
- 1 砕石
 - 2 整備埋土
 - 3 整備埋土粘土
 - 4 10YR5/2灰黄褐粘土 鉄分含(水田層)
 - 5 10YR4/3にぶい黄褐粘土(上位は10YR5/4) 鉄分含 下は整地層



第15図 14-6・7平面図・断面図

おり、最近まで開口していた状況である。12世紀の石敷直上まで溝は掘り込まれているが、石敷面には及んでいない。溝は浚渫したように掘削しており、長く使われていた状況を示す。近世の用水路跡と思われる。

層位：上層の整備盛土は層厚10cm、下層の旧水田層は層厚20～25cmを測る。当該地の旧水田は土を盛って造り替えが行われたと思われ、新旧2層を確認した。上層の水田が厚く、下は5～10cmの厚さで薄く、鉄分が集積している。標高は14-1で36.0m程度にあった鉄分集積層が14-3では標高35.8mで確認しており、20cm程低い。14-1の南側では北から続いてきた層が変化してきており、水田の面が一段下がった様子である。中央を東西に横切る用水路跡と思われる溝は、上層の水田上を肩とする掘り込み跡と、下の鉄分集積層から2重に掘り込みが確認できる。

鉄分集積層と石敷の間の層は、層厚10～15cmを測る。断面19-20では5・6層にあたる。5層は砂を含み、状況から14-1西壁の断面13-14では10・11層が対応すると思われる。南の14-2では10cm程度低くなる断面15-16の7層に相当する。7層は鉄分を多く含み、14-3と比べると厚い堆積となっている。6層は14-1調査区の断面13-14では12層に対応していると思われる。6層は薄くなって調査区南側で消失している。

石敷：北西隅の石の標高は35.66mで、南西は35.63mである。高低差は3cm、双方の距離は4mを測る。東西方向では1.2m程しか間隔がないが、北西側で35.63mを測り、北東側では3cm程下がっている。南東側は35.59mで西から4cm程低くなっている。使用されている石は5～10cmが多く、小さいのは3cm程度、25～30cmの大ぶりの石も使用されている。

14-4調査区（第12図、写真図版10・11）

池の岸側から池中に向かって調査区を設定している。池岸に垂直の方向で設定して北西-南東方向に長くなっている。距離は8.0m、幅は2.5m程度である。周辺は整備の護岸や盛土を残し、外側に土嚢を積み囲んでいる。

検出した遺構は北西側に池底、南東側に池岸、岸の南東側に集石箇所を検出している。5次調査区の跡や用水路跡と思われる溝跡も検出した。

整地層：整地層は、池底及び底から立ち上がる岸側にかけて検出した。断面1-2では、列記すると8・19・20・22・23・24・28・29・30層である。8層は上層であるためか、20層など他の整地層よりも締まりに欠ける様子である。20層は整地を切って溝を設けたかの様な検出状況で、21層は灰色を呈し砂を含んだ状態で、一時水が流れた跡の様にも看取される。溝状であるがもう一方の溝肩は検出していない。20層と22層の境は平面でも確認でき、池底に向かい南北方向に向いている。東側が22層側である。

整地層は陸側を70～85cm程掘り込んだトレンチで確認している。標高は33.51～34.38mである。池底側は底の広がりや優先してトレンチは開けていない。水を排出するためやむを得ず小規模に開けた箇所では、陸側と同様に、整地層は硬く締まっていた。

池底：池底の標高は33.97～34.0mである。調査範囲の北東側から3.0m岸に向かった周辺から岸側へ緩く立ち上がりを見せる。池底には3～15cm大の石がまばらに確認できる。東側の5次調査範囲の池底にも石があり同様の状況である。

5次調査区の範囲は埋土の違いから識別できた。水田層中にブロック層で埋められている範囲を確認しており、5次調査の範囲と捉えた。底面標高は34.01～34.08mである。

池岸：調査区南東側に検出した岸は標高34.2～34.3mを測る。池底からは20～30cmの高さで立ち上がっている。断面の8層は標高34.38mであるが部分的な確認である。周辺は水田耕作の影響で平坦に削平を受け、また、溝が横断しており、岸の立ち上がりの傾斜を把握することができなかった。

集石：調査区南東側の約1m四方の範囲に集石が認められた。石の大きさは3～15cm大である。北側の隅に40cm大の石が1個だけある。周辺を少しだけ下げてみたが掘り込みの痕跡等は確認していない。これらの石の標高は34.42～34.53mで、池側に向かいやや下がっている。上部には水田や整備の埋土が30～40cm程堆積していた。

溝跡：調査区を横断して1条の溝を検出した。埋め戻しなどの状況から近世の用水路跡と思われる。検出長は2.2mで、方向は南西―北東である。幅0.9m程度で、深さ54cm程である。溝の底面標高は南西側で33.66m、北東側で33.8mである。南西側に向かって流れる溝である。

断面1―2では9層が水田層あるいは水田の畔であり、溝に乗り出し落ち込んできている。粘土ブロックが混じる土砂で埋め戻された所を見ると、直前まで開口し使われていた。下層では黄色粘土ブロックが混入しないため上層とは異なり、溝に流れ込んだ自然堆積の土砂と思われる。

14-5調査区（第13図、写真図版12）

中島の南東側、南北3.3m、東西2.5mの調査区である。南側が池側、北側が中島である。島の裾から土嚢を積んで池側を囲んで調査を行った。5次調査区と重なっていたため、池側は深く掘り込まれている。調査区西側は整備の石敷護岸を残して調査した。石敷の北側は水田層が残っており、5次調査区外である可能性がある。東側も岸側の調査区壁には水田層があり、5次調査区の端であることが分かる。

整地：調査範囲の島と島から池底に向かう部分では表土や埋め戻し土を取り除くと整地層が露出して現れた。整地層の色調はオリーブ～緑灰色で砂等が混入していた。島の検出標高は34.1～34.2m程で、5～10cm大の石がまばらに検出した。島に敷かれていた石の残欠と思われる。

池底：池底は検出していない。5次調査は島から池中に傾斜し、池底で一気に深く掘削していたが、今回の調査では深追いはしていない。水が入り込んで埋土の状態を全て確認することはできなかったが、底の感触としては締まりのない土で、調査後の埋め戻し土と思われた。

池底側は標高33.6m程まで調査している。島からは60cm低い位置である。南西側の14―4調査区での池底標高は34.0mであり40cm低い。

護岸：結果的に5次調査区の埋め戻し土を外したところ岸が現われた。島からの傾斜は急であり、護岸の石が敷かれた様子は確認できなかった。この傾斜がそのまま島の岸部分に相当するかは疑問である。5次調査や昭和29年の2次調査の段階ですでに周辺は水田化されており、水田面が掘げられていた影響から護岸の残存状況は厳しい状態である。

14-6調査区（第14図、写真図版13）

池の南東側において、北西―南東方向に長い3.6×1.8mの調査区を設定した。昭和整備の池岸側から池中に向かって2.3m、島部分は1.3m程の距離である。北西側には昭和整備護岸があり、これをそのまま残して南東側を調査した。

整地：断面5―6のある南西側では、下に整地層を確認した。2.1×0.4m程度の範囲で上面には水田層を層厚10～12cm程確認している。断ち割り調査は行っていないが、整地層はオリーブ灰色を主に、浅黄色のブロックが混じる様子であった。

池底：標高は34.16～34.22mである。南東方向に向かうにつれて若干低くなる様相を呈している。14―4の池底から20cm程高く、むしろ岸側の標高に近い。しかし池側から続く位置であることと、14―4や14―7の岸の方向からみて池底と考えられる。

護岸：調査区内では検出していない。状況から、水田により護岸が崩された可能性があり、池底から岸への立ち上がりは更に外側となる可能性がある。

14-7調査区（第14図、写真図版14）

14-4 調査区の東側 2～3 m に位置し、1.0×0.8m 程度の小規模なトレンチである。表土は芝と碎石で、整備盛土の層厚は 40～50cm 程ある。下は水田層と思われる層が層厚 10cm 程あり、池側に向かって下がっている。

層位：断面 3-4 にある 5 層は旧水田層の下にある。層厚 10～17cm で、にぶい黄褐色の粘土である。粘性が少なければ周辺の畑の土等に近い色調で、14-4 では断面 1-2 の 5 層が対応する。観自在王院の整地層には見られない土であり、後世の堆積土である可能性がある。この 5 層上には 3～10cm 程度の石が散在する。石の検出標高は 34.36～34.45m である。周辺が水田化したのが近世以降と考えると、5 層はそれ以前であり、観自在王院廃絶後の堆積と考えられる。

整地：4 層（旧水田層）の下にあり、調査区中央から池側に下がっている。池側と反対側は 5 層の下にあるが標高 34.3m 程で平坦である。狭い調査区であり、整地と思われる表面の検出を行い、断ち割り調査は行っていない。

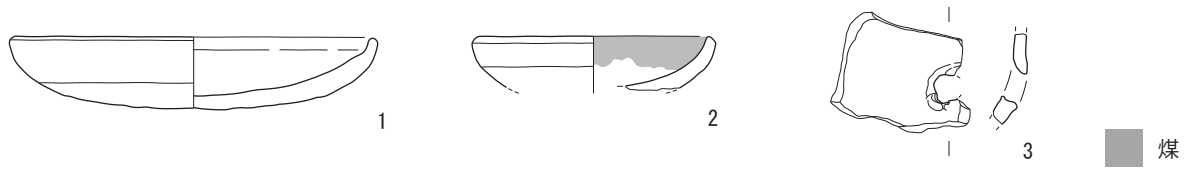
護岸：現在の池岸からは 2.1m 南東側に離れている。水田層が池側に下がる角度に合わせて整地面が池側に下がっている。整地面が南東側の石の集積箇所では平坦であり中央から池側に傾斜している。調査区中央付近で一番高く、標高 34.3～34.32m を測る。ここから調査区北東側端まではわずか 20～30cm の距離であるが 10cm 程度下がっている。岸の位置は 14-4 からの延長にあり、現在の復元護岸より外側に位置するものと考えられる。

3 出土遺物（第16図、写真図版16）

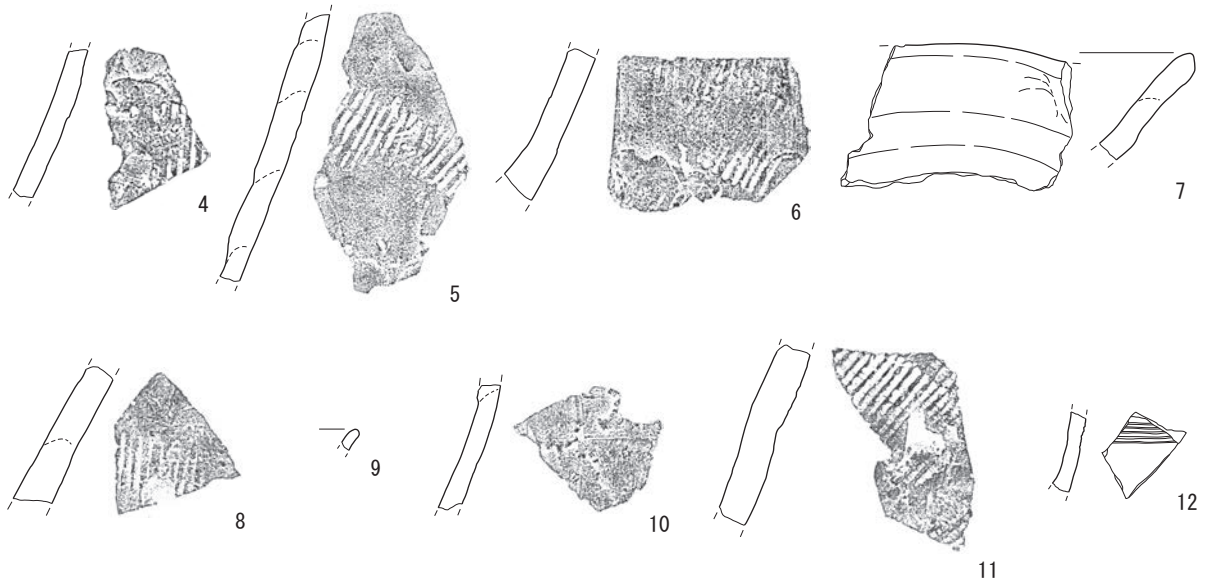
かわらけ、陶器、磁器、木製品等が出土したが、全体でコンテナ 2 箱に満たない量である。

かわらけは、旧水田層や盛土層にも混じるが、石敷の検出中に出土したものが多い。かわらけ（No. 3）は池底の整地層直上からの出土である。陶器は水田や整備時の埋土中に多い。14-4 では一部池底の整地層を掘削し、渥美産の甕（No. 6）や、整地層直上で常滑産の鉢（No. 7）が出土した。14-1 では水田層直下から 17 世紀の唐津産陶器（No. 15）が出土した。近世にはこの高さまで堆積していたようで、出土地点が一番近い断面は 9-10 の 7 層直上あるいは旧水田層直下である。7 層は砂や鉄分を含み、自然堆積の様相を呈する。瓦（No. 16）は 14-2 からの出土で、一番車宿に近い箇所である。櫛（No. 17）も 14-2 の石敷直上からの出土である。14-2 は水田層が石敷直上にあり、近世の物の可能性もある。板状木製品（No. 18）は 14-5 の中島の調査箇所から出土している。出土層は整備盛土中であり、現代の物の可能性もあるが、加工痕があったため掲載した。

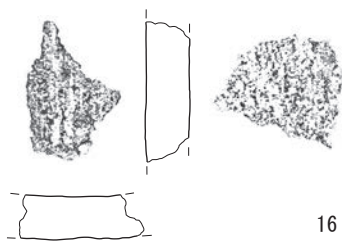
かわらけ



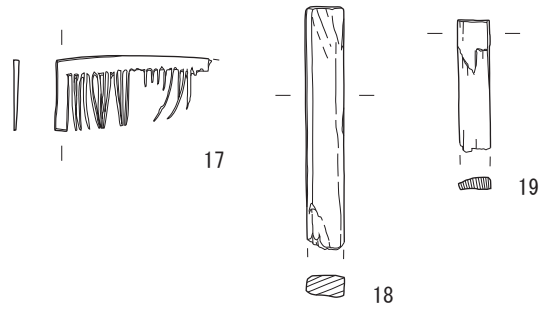
国産陶器



瓦



木製品



0 1:3 10 cm

第 16 図 出土遺物

第2表 かわらけ観察表

() 推定値 () 残存値

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	法量 (cm)			残存率 (%)	年代	備 考	登録No
					口径	底径	器高				
1	16	16	14-1南隅 石敷直上	手づくね大	(14.6)	—	2.9	40	12 c	摩滅 反転実測	93-1
2	16	16	14-5 整備埋め土	手づくね小	(9.6)	—	—	30	12 c	内面口縁に煤付着 摩滅 反転実測	86
3	16	16	14-4 池底	手づくね大	—	—	—	小片	12 c	焼成前に指で穿孔か	72-1

第3表 国産陶器観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備 考	登録No
4	16	16	14-1・2 重機対応 水田層	常滑	甕	胴部	12 c	押印 表面に擦り痕	1-3
5	16	16	14-1・2 重機対応 水田層	渥美	甕	胴部	12 c	押印	1-2
6	16	16	14-4 池底整地層	渥美	甕	胴部	12 c	押印	67
7	16	16	14-4 池底整地層	常滑	鉢	口縁～体部	13 c 前	II類片口鉢 外面に指痕	71
8	16	16	14-5 整備埋め土	渥美	甕	胴部	12 c	押印	77-2
9	16	16	14-5 整備埋め土	渥美	山茶碗	口縁部	12 c		77-3
10	16	16	14-6 整備埋め土	渥美	甕	胴部	12 c		84
11	16	16	14-7 東壁 水田層	渥美	甕	胴部	12 c	押印	97
12	16	16	14-5 整備埋め土	古瀬戸	瓶	胴部	13 c	外面に横位沈線5本	87

第4表 土師器観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	器種	部位	年代	備 考	登録No
13	—	16	14-1～3 重機対応 水田層か	坏	口縁部	平安		1-1
14	—	16	14-1～3 重機対応 水田層か	坏	口縁部	平安		1-4

第5表 近世陶磁器観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備 考	登録No
15	—	16	14-1南東側 水田層直下	陶器	碗	口縁部	17 c	唐津産	44

第6表 瓦観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備 考	登録No
					長さ	幅	厚さ				
16	16	16	14-2 石敷直上	平瓦か	5.7	5.2	1.8	49.0	2.5Y7/2灰黄	中世か 凹面に布目 凸面に縄目か・離れ砂か	25

第7表 木製品観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	法量 (cm)			備 考	登録No
					長さ	幅	厚さ		
17	16	16	14-1 南西拡張部 石敷面直上	櫛	(6.2)	3.0	0.2		40-2
18	16	16	14-5 整備埋め土	加工木	(9.6)	1.5	0.9		90
19	16	16	14-5 整備埋め土	加工木	(5.2)	1.3	0.5		80-2

IV まとめ

14次調査区は2・8次調査区と一部重なる箇所があるよう調査区を設定した。具体的に当時の調査区範囲を把握し、再測量できたことは一つの成果である。ただし、これらの調査区を合成する際には測量誤差や縮尺などの問題や、2次調査区や整備でのトレンチ調査は簡易的な図で表示している箇所があり、基準となる礎石・景石に合わせて調整し、合成した箇所がある。(第4図)

道路遺構について(14-1~3)

14-1~3ではほぼ全域で石敷の道路跡を検出し、残存状態は良好であった。検出した石敷は、14-1調査区の北西側では標高35.8m、14-2調査区の南西側では35.36mを測り、高低差は40cm以上を測る。双方の距離は24mを測り、見た目より高低差があることが窺える。現在の昭和整備面は、北から南に緩く下げて仕上げているが、当時の遺構面も同様の状況が窺える。

この調査区南側では見切り状に20cm大の石が10個並んでいた。距離は2.15mで、方向はN83°Wを呈し、調査区外に続く。周辺の車宿や土塁とも軸方向が異なるが、この見切りの延長は毛越寺東門の北側に向かっている。毛越寺東門を入ると大泉が池北岸を経由して金堂円隆寺に向かう通路遺構が確認されているが、見つかった見切り状の遺構は毛越寺東門や境内の通路遺構と連続する軸線でもないことから、東門との関連性は薄いと考える。ただし、この見切りを境として石敷を構成する石が北側では5~15cmの比較的小さい石が主体を占め、南側では小さい石も含まれるものの15cm以上の比較的大きい石が主体を占めるようにも見受けられることから、何らかの境界を有する可能性が想定され、次年度以降この見切りの西側の延長を確認するための追跡調査を行う必要がある。

水田層と石敷面の間の層については14-1で一番厚くなっている。また石敷面が下がる東端においても同様の状態である。14-2や14-3は水田により削られていたため、全てが失われた箇所もある。過去の2・8次調査では、土に石を混ぜて舗装道路と判断した層であったが、今回の調査では特定するには至らなかった。舗装なのか後世の堆積なのかは、今後の検討課題である。

課題はあるものの、これまでの観自在王院西側で確認された石敷の中では遺構の検出状況もよく、非常に整った石敷で、毛越寺東門の門前にふさわしい重厚な石敷と言える。

この石敷の下に施された整地の様相を把握するため、14-2南側において8次調査の断ち割りトレンチを再掘し堆積状況を確認した。安全確保のため1m程の掘削に留めトレンチの底面まで到達していないが、整地層は西から東に流れ込むような様相を呈し、下層では小石及び粘土ブロックの混入は認められるものの、4・5層は小石などの交じりは少なく、層としても薄く徐々に仕上げ、整地表面は地山に類似した見え方に仕上げていた。この仕上げは12世紀の平泉においてよく見られる整地の仕上げであり、観自在王院特有のものではないことに留意願いたい。

園池について(14-4~7)

池側の調査では、12世紀段階の池底を検出した。整備前には水田耕作されていたため、遺構面が削平され、平坦にされた可能性があるが、確認した池底をみると池底面は整地盛土で成形されており、池底に伴う石も僅かであるが検出した。14-4調査区では池岸の立ち上がり付近に整備前まで使われていたと思われる溝が通り、容易に池の形状が把握できなかったが、14-6では現状より外側に池が広がる可能性が示されたことも成果である。ただし、水田により削平され失われている可能性もあり、注意が必要である。従前から指摘されていたことではあるが、開田時の削平はあったものの良好に保存されていた園池遺構と言える。また、昭和整備における池の整備現状を把握できたことも大きな成果である。



14-1 全景（西から）



14-2 全景（南から）



14-3 全景（西から）

写真図版1 14-1～3



14-1 全景（北から）



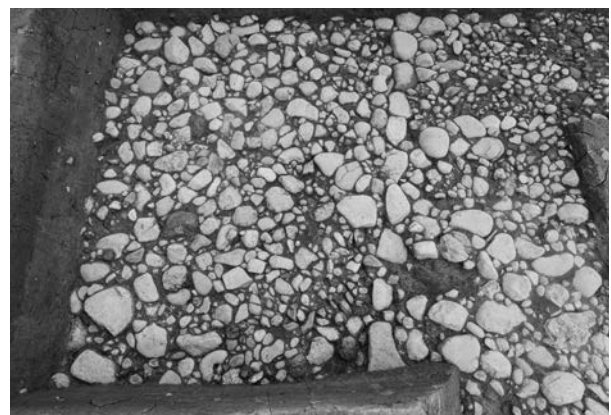
西側の調査状況（南から）



西壁 断面 13-14



中央西寄りの石敷（南から）



南西側見切り状石列（東から）

写真図版2 14-1



調査区北側の状況（西から）



断面 11-12（北西から）



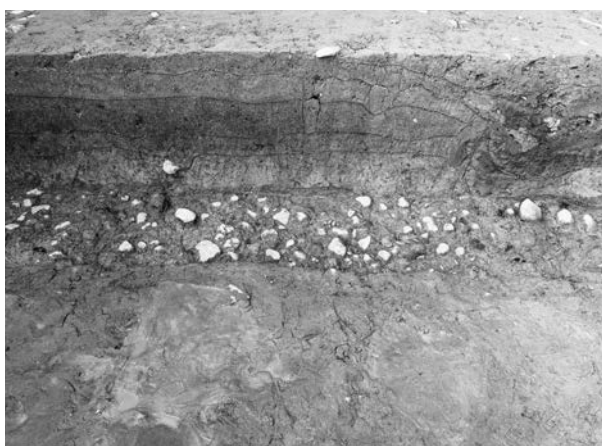
東側の状況（北東から）



北壁断面 断面 7-8



断面 7-8



断面 7-8



断面 7-8



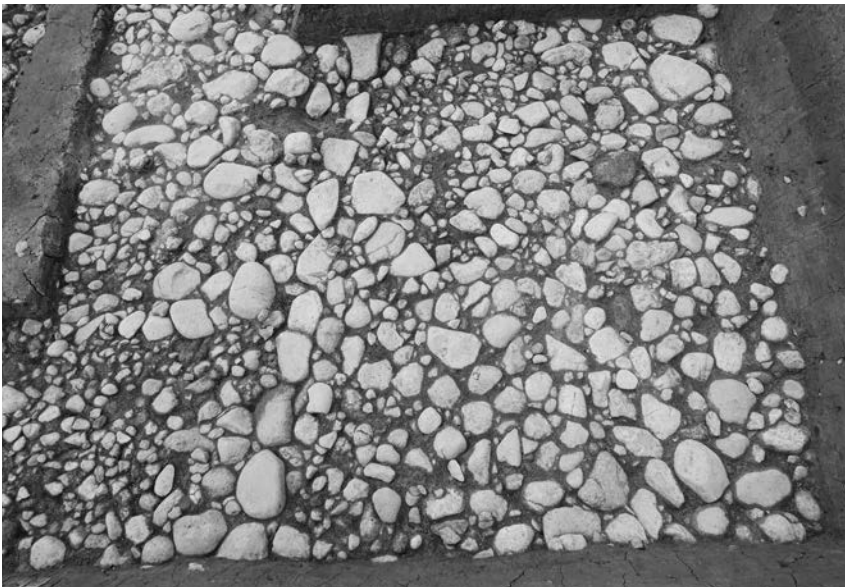
東側の状況



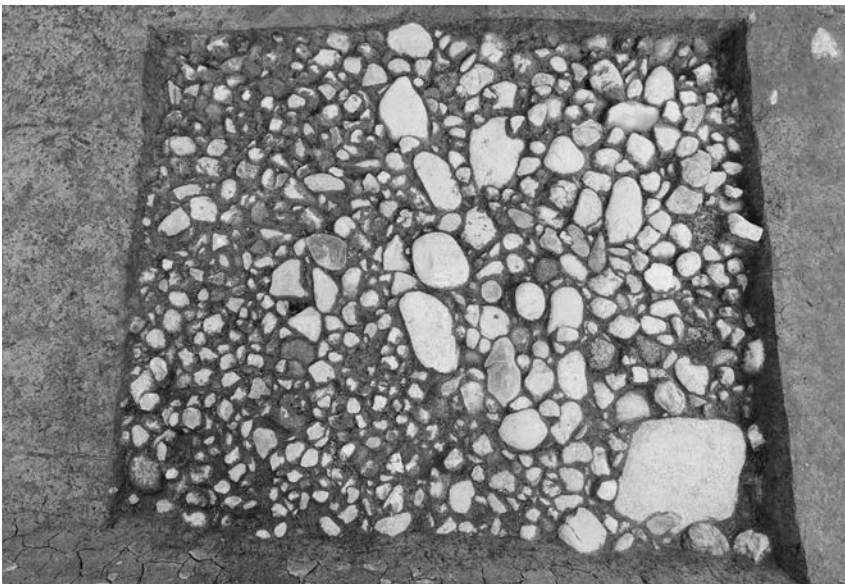
断面 9-10

2次調査跡掘削後
東にトレンチを設け石敷を確認した

左写真トレンチから続く調査区を設け
石敷の状況を確認した



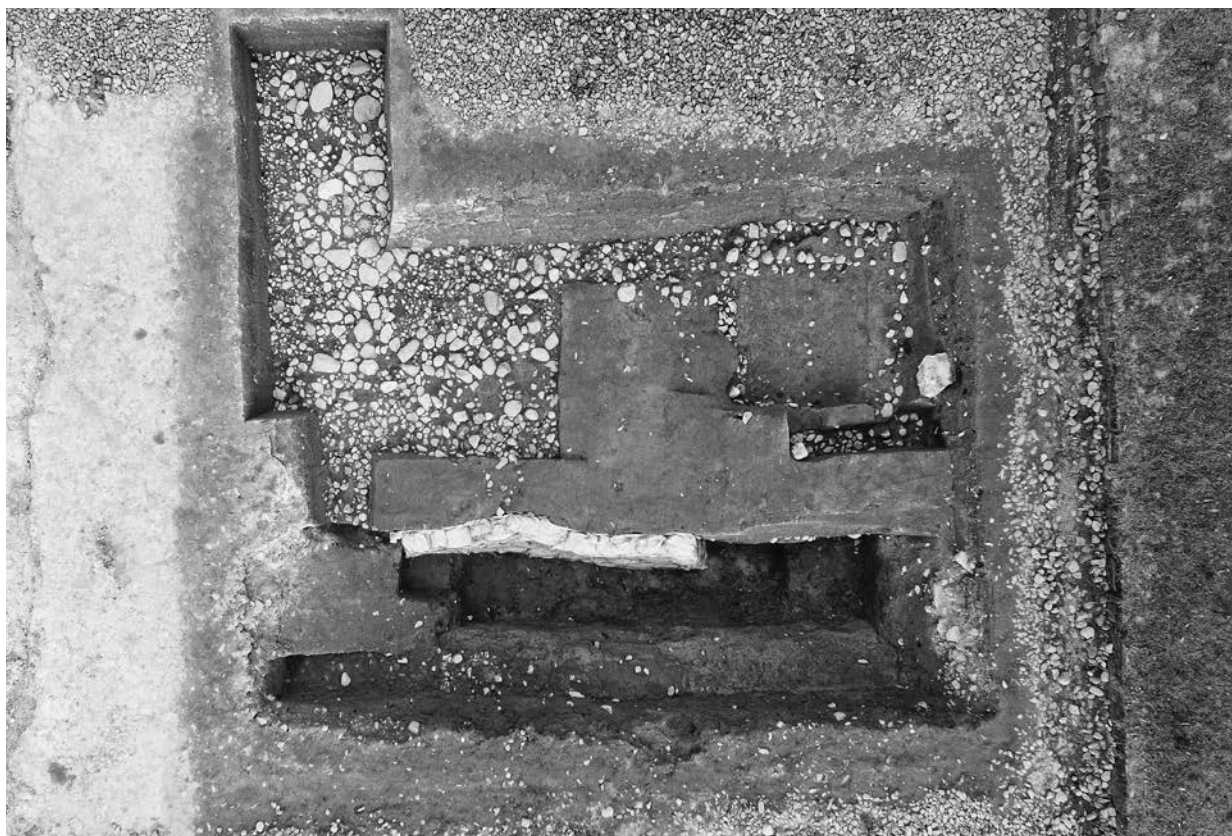
見切り状石列（西から）



中央西寄りの石敷（北から）



東側かわらけ出土状況（西から）



14-2 全景（上が北）



西壁 断面 15-16



北壁 断面 5-6



5次調査トレンチ 断面 1-2



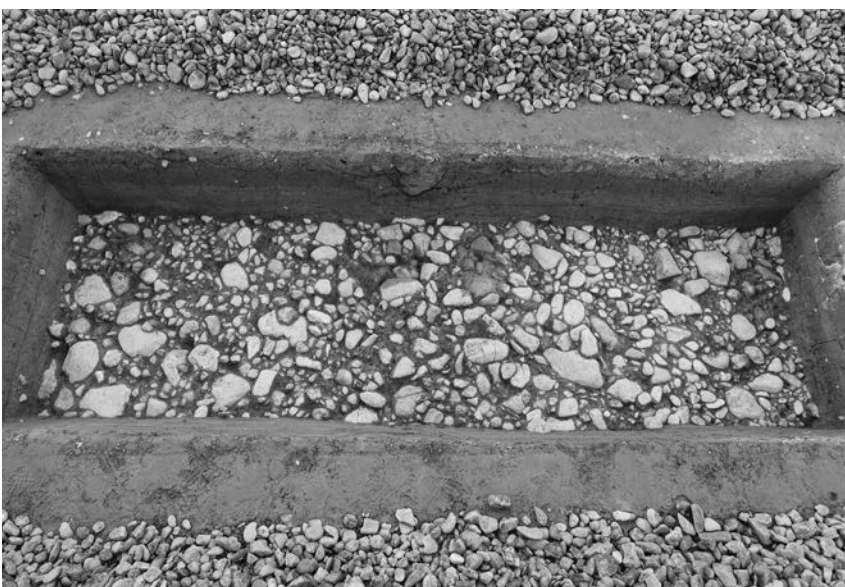
石敷検出状況（西から）



石敷検出状況（西から）



石敷検出状況（東から）



西壁 断面 19-20



14-1 ~ 3 (北から)



調査前の状況 (南西から)



調査終了状況 (南東から)



14-2 南 5次調査トレンチ (東から)



14-3 (南から)



14-4～7 全景



調査前の状況（西から）



調査前の状況（東から）

写真図版9 14-4～7



調査区全景（南から）



岸側の状態（西から）



集石の検出状況（東から）



岸側の状態（東から）



池底の状態（北西から）



池底の状態（北から）



断面 1-2



整地の状態（西から）



整備護岸と整地上面（東から）



調査区全景（北東から）



断面 7-8



断面 5-6



池底の状況（東から）



東側の状況（西から）



集石検出状況（東から）



集石検出状況（西から）



断面 3-4

写真図版 14 14-7



14-4 整備護岸の状況（北東から）



14-5 調査開始状況（北西から）



14-4 池底・陶器出土状況



14-5 遠景（南から）



14-7 断面



14-6 調査状況（南から）



14-5 埋戻状況（南東から）



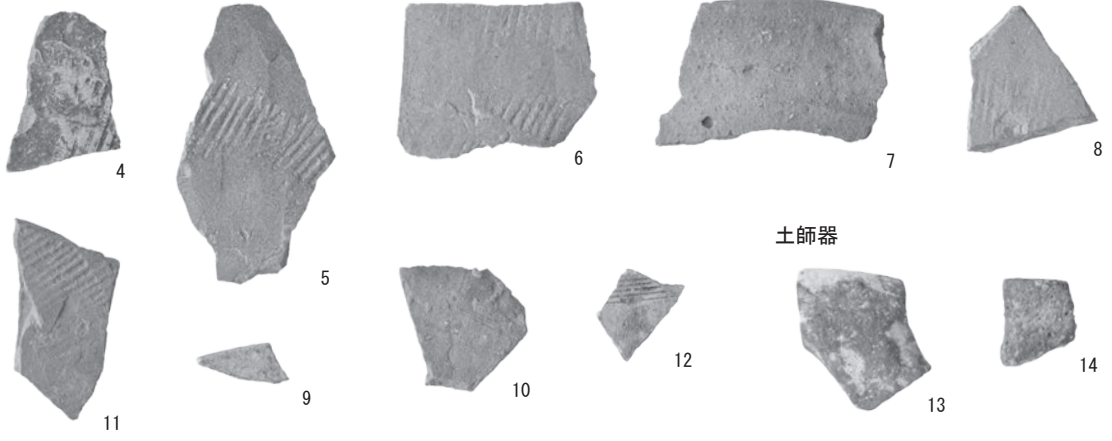
14-5 埋戻状況（南から）

写真図版 15 調査状況

かわらけ

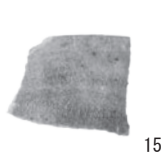


国産陶器



土師器

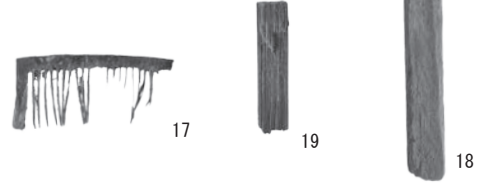
近世陶磁器



瓦



木製品



写真図版 16 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	めいしょうきゅうかんじざいおういんていえんはつかつちょうさほうこくしょ							
書名	名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書V							
副書名	第14次調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県平泉町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第147集							
編著者名	島原弘征 鈴木江利子 鈴木博之							
編集機関	平泉町教育委員会							
所在地	〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地2 電話(0191)46-2111(代)							
発行年月日	西暦2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんじざいおういんあと 観自在王院跡	いわてけんにしいわいぐん 岩手県西磐井郡 ひらいずみちょうひらいずみ 平泉町平泉 あざしらやま 字志羅山地内	03402	NE76-1052	38° 59′ 18″	141° 06′ 35″	20220829～1212	150㎡	史跡整備を目的とした内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
観自在王院跡	寺院	12世紀	道路跡（石敷） 溝跡 整地層 園池		かわらけ 国産陶器 土師器 瓦 近世陶磁器 木製品（櫛）			
要約	<p>観自在王院跡西側の道路跡、及び舞鶴が池南東側護岸を対象とした内容確認調査の報告である。調査の結果、南北方向の石敷道路を確認した。</p> <p>観自在王院跡の西側では、昭和47・52年の調査で確認した石敷道路跡を再検出し、様相を把握することができた。また、毛越寺東門の延長部分では、見切り状の石列を確認した。部分的な検出のため、東門との関連性ははっきりしないが、追跡調査を行う必要がある。</p> <p>舞鶴が池南東側では、12世紀当時の池の岸とみられる立ち上がりを確認した。また、池の底及び島上には3～15cm程の石が部分的に葺かれていた状況を確認した。</p>							

岩手県平泉町文化財調査報告書第147集

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅴ

—第14次調査—

印刷 令和6年3月27日

発行 令和6年3月31日

編集・発行 平泉町教育委員会
〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地2
電話 (0191) 46-2111 (代) FAX (0191) 46-2015

印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 (0191) 46-4161

© 平泉町教育委員会 2024